

鵠沼

久久比奴末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 8 9 号

【追悼】高木和男元会長ご夫妻

故高木和男氏鵠沼関連年譜	編集委員会	表紙2
高木和男先生のお人柄を偲んで	有田 裕一	1
高木ご夫妻の思い出	浅野 陽子	3
「最後の弟子」と「幻の伯父さん」	松岡 喬	5

【特集】鵠沼と高瀬家の百年

序章 高瀬彌一の祖父と父	渡部 瞭	7
高瀬彌一と大正義塾派	伊藤 聖	15
高瀬彌一先生	青木 悠	40
鵠沼人=高瀬弥一	渡部 瞭	41
特別寄稿 川袋の家の思い出—父に	吉川八重子	51
特別寄稿 川袋高瀬邸の平面図・建物配置図	高瀬 三郎	62
高瀬弥太郎君を偲ぶ	梶倉 健	65
山口寅之輔と松島苑住宅地	有田 裕一・佐藤 和子	67
特集『鵠沼と高瀬家の百年』解説地図	編集委員会	70
「鵠沼を語る会」活動の記録	総務委員会	71
編集後記		74

『新編相模風土記稿』（天保13年、1842）に、「鵠沼村久久比奴半良」

とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠沼を語る会 発行

追悼

高木和男元会長ご夫妻

高木和男先生の お人柄を偲んで

鵠沼を語る会会長 有田 裕一

今年の3月には高木夫人が先に旅立ち、それを追うように去る5月26日、先生も95年の生涯を終えられました。相次いでお二人がこの世を去り、高木家を訪れても今はもう迎えてくださる人はいません。

私が商売をしている関係で、奥様とは何十年とお話をする機会がありました。しかし、高木先生と親しく会話ができるようになったのは、多分「鵠沼を語る会」で一緒させていただいてからであろうと思います。

先生は一時、ブランクがあったとはいえ、語る会の創立の近くまで遡る古い会員でした。私が郷土史に関心を持ち出したのも、先生の『鵠沼海岸百年の歴史』がその原点であり、その内容が余りに身近であったり、自分の知っている話、全く知らずにいた話、一つ一つが興味深いものでした。

その本の初版は1981年であり、その内容は川袋の今昔から始まり、賀来神社、東屋、当時の町並み、行事、災害、地形、史跡、戦時中の町内会、敗戦、そして戦後の乏しい生活の中から自然発生的に誕生した文化活動、等々、よくぞこれまで書き残してくれたものだと思います。この業績は、他の地域には真似のできないものであり、われわれの誇りとしたいものといえます。そしてこの温故知新の気風の郷土史研究をわれわれ「鵠沼を語る会」は大事に受け継いでいかなければなりません。

近年になり、先生が「語る会」の会長になられた時、例会通知もワープロを自



分で打ち、その冒頭的时候の挨拶の部分も、味のあるものでした。何年か前、体調を崩され、家の中でも車椅子での移動に頼ることになった時も、「語る会」例会には出席したいという意志が強く、また、会員の皆さんの顔を見るのが楽しみであったため、私が車で送迎の役に当たったことも思い出の一つです。

われわれの知る高木和男先生は郷土史の分野でのお付き合いでしたが、実は先生は栄養学、調理学、労働科学、食生活史の分野のエキスパートなのです。その著作は多数あり、その教えは先生のお弟子さんたちが集うNPO法人「湘南栄養指導センター」に受け継がれています。

奥様も古くからご自宅で料理教室を開かれ、結婚前の娘さんから家庭の主婦まで、卒業した生徒は多数にのぼります。この教室の献立は、家庭的、実用的であり、次の教室の新しい献立を考え出すのにも、私は素材を扱う商売柄、近くでその御努力を見ることができ、最後まで料理のアイディアが尽きることはありませんでした。そしてご夫婦共、地元の商店街を愛し、その育成にも心がけていられたのも忘れられません。今回の邸宅地の市への寄贈も、このお二人の遺志を忘れず、是非有効な活用方法を実現させたいものと思います。

もう一つ、先生の業績で忘れてはならない事柄があります。国立横浜高等工業の学生時代、高木先生は鵠沼海岸で蜆気楼を発見し、この記事が新聞に掲載され、偶々東屋に静養に来ていた芥川龍之介の目にとまりました。

これが名作『蜆気楼』になったのです。

このことは会誌『鵠沼』にも既に記されていますが、ご本人は何回これを話題に出しても、あまり自慢するわけでもなく、「当時家の前を人がぞろぞろ通るので、何だろうと思ったら、蜆気楼を見に行く人だった」位で、別に珍しい現象ではないという風でした。

このことは、先生が亡くなられる1週間ほど前、病院へお見舞いに伺った時、その日は以前聞いていた健康状態より大分良好とお見受けし、「先生と蜆気楼の記事また写真が、先日横浜の近代文学館の『芥川龍之介展』で出品され、佐江衆一さんがその講演をされましたよ」と話した所、嬉しそうに「そうか、そうか」というようにうなづかれました。

厳しさと同時に優しさを持つご夫婦は、今頃天国で会い、「おい、お前、先に来ていたのか」と手を取り合って歩まれていることと思います。

最後になりましたが、高木和男先生ご夫妻のご冥福をお祈り申し上げます。

(ありた ひろかず)

高木ご夫妻の思い出

浅野陽子（会員）

4年前の春、30年ぶりに故郷鵜沼に戻ってきた私は、早速私たち夫婦のお仲人をして下さった高木家に報告に伺いました。

「何故日本が欧米の植民地にならなかったか、きみ、わかるか？」と唐突に尋ねられました。突然のことにとまどっていると、「鉄だよ、きみ。」そして『食からみた日本史』を書かれたときに、鉄の冶金の知識に思いついて、解決の糸口を得たと話されました。

日本にはじめて鉄砲が伝来した1543年の種子島で、ポルトガル人が持ってきた鉄砲を領主種子島時堯が2000金をもって2挺買い上げたことに端を発し、これが堺の商人や、紀州根来寺の坊さん等により日本各地に伝えられ、1575年の長篠の戦いで織田軍は3000挺もそろえられるようになっていた。

何故中国やインドで鉄砲が作られず、日本では急速に普及したのか。この基礎になったものは、戦国時代にあつて、農民徴兵用にも簡単に使える武器の需要がたかまっていたこと、また日本の刀鍛冶の技術が優れていたことによる。日本の刀鍛冶がこのような高級の技術をもつことができたのは、細身でも折れることなく切れ味のよい日本刀を作る技術を追及することにより、鉄の性質をよく知っていたからだ。火薬はすでに烽火の打ち上げや花火で十分に製造になれていた。一方中国の刀鍛冶は鋼鉄を作る技術を知らなかったので青龍刀のような重い刀しか作れず、薄く伸ばせる鉄を作れなかったので鉄砲の筒を作ることができなかった。すなわち日本は多数の鉄砲を装備した軍隊を持っている東洋唯一の国として、西欧諸国からむしろ恐れられていたのではないか。このように自然科学との結合ができて歴史学は社会発展の理論付けができるのだ。これが18世紀に日本が他の東洋諸国のように侵略されなかった理由ではないかと。このことが東大教授江口朴郎氏の「18世紀の欧州諸国の東洋侵略に日本だけがなぜ堪えられたのだろう」との問いかけに対して高木氏が宿題としていた御自身のの回答であるようでした。

あたりに薄暮がせまってくるまで延々と熱っぽくお話しになりました。夫人が何回目かのお茶のおかわりをついでくださりながら「はなしの内容わかる？」と、

私に心配そうに尋ねられました。

この説が正しいものであるか、浅学の私にはわかりません。ただ、90歳を過ぎても尚、「何故だろう」と思考する、科学する心をお持ちになっていらっしゃることに驚きをおぼえました。

ご著書の中でも、「年月をかけて、物証を求めてその疑問を自分なりに解き明かすことです。我なりに結論が出たときは嬉しいものです。そのうち間違っていることが分かったら改めればよいし、間違いは恥ではありません。改めない時は恥ですが、考えなければ進歩はありません」と述べられています。(1999年3月発行『読みもの唯物弁証法』芽ばえ社より)

私たち兄弟は、高木ご夫妻を親戚でもないのに「おじさん、おばさん」と慕っていました。我が家（私の実家）とは、父の旧制湘南中学1期生、2期生以来の親友として、私が生まれる前からの長いおつきあいでした。「父と母はどうして結婚したの？」両親を早く亡くした私の度重なる問いかけに、にっこり笑って「そのうちに話してあげるよ」と仰ってそのままになっていたのが、後に『踏み拓いた峠道』という本を著していただき、知らなかった両親の結びつきを知ることができました。

私の結婚に際しては親がわりとして、お仲人になっていただきました。「何でもそんなに良くしてくださるの？」という質問には、「貴女のうち（実家）は、いつも人が沢山集まって、まるで梁山泊のようだった。高木は帰宅するとすぐ、新婚までもないのに、葉山に行こうって、夜はほとんどそちらで食事をして、新婚ムードなんてまるでなかったわよ。そちらの方が私も楽しかったけど。」というもおばさんからは同じお返事がかえってきました。

結婚準備でキッチン道具を買いに同行して下さったときも「どうせ貴女の両親の遺伝では子沢山だろうから」とシチュー鍋、中華鍋、ボール等全て一番大きなサイズの物を買わされました。もっとも、予言が当たり重宝しましたが。夫人は「私が教えてあげるから、将来に備えて、お料理の先生になる勉強をなさい。お料理は、華道や、茶道とちがって家元制度はないから」と言って下さいました。このような大きな愛情と包容力でいつも見守って下さいました。思い出す度感謝の気持ちでいっぱいになります。

8月22日に「高木夫妻を偲ぶ会」が藤沢市民会館で開催され、170数名の多分野にわたる参加者がお二人を偲びました。

多くの方が共通に話しておられたことは、「歴史的に、実証的に物事を見る目、そして広い分野に亘っての興味と探求心を持たれていた方」だということでした。専門分野の栄養学についても、理科的発想と同時に、歴史、文化の面からも栄養、食文化を考えられた希有な人という評価でした。

後日、栄養指導センター理事の武田さんから「高木先生のベッドサイドテーブルに置かれていたわ。貴女のお父さんでしょう」と父の肖像写真をいただきました。42歳で逝ってしまった父の写真を半世紀以上も座右に置いて下さっていた深い友情に、新たに大きな感銘を受けています。

「鵜沼の用水路について誰かしらべないかな」とも仰っていました。もっともっと、いろいろお聴きしたかったし、お話ししたかった。おじ様にはお婆様の死を伏せていたため、顔に出てしまう私は病院にお見舞いに行けず、それだけが心残りになっています。

私の両親と黄泉の国で再会されたかしら、と思う一方、唯物論者の双方から笑われるかなとも思います。謹んでご冥福をお祈りします。合掌。

(あさの ようこ)

「最後の弟子」と「幻の伯父さん」

松岡 喬（会員）

私が入会した98年当時、高木さんは「鵜沼を語る会」の会長を務められておられた。挨拶をするといきなり「僕は松岡静雄先生の最後の弟子だ」と言われてびっくりした。高木さんはご専門が栄養学で祖父とは全くの畑違い、また静雄が「神楽舎」と呼んでいた講堂で講義を受けた学問上の弟子ではない。後で述べるように、ひょっとしたきっかけで最晩年の静雄の話を聞くようになり、影響を受けられたものと思う。

「先生ほどの天才は見たこともなく、才能では及びもつかないが、その姿勢、国語(言葉)を大事にすること、若い人を大事にすること、この二つを肝に銘じて生きてきた」と言われていた高木さんはまさに静雄の信念を受け継がれた「最後の弟子」であった。

私が高木さんのお宅にちょくちょくお邪魔するようになってから、「ことによれば僕は君の伯父さんだったかもしれないんだよ」と言われた。これを言われると千恵子夫人が「またそんなことを」と嫌がられるものだから、毎回のように夫人の前で言われるのだった。

高木さんが静雄と会われたのは1935年の暮れ、静雄は1936年の5月に没しているので最晩年ということになる。高木さんを静雄に紹介したのは、同い年(1909年生まれ)の親友であった葉山又三郎氏(故人・元藤沢市議)の夫人ふゆさん(故人・元藤沢市議)であったというが、これが静雄の次女喜久子のお婿さん候補ということだった。

そういういきさつであれば静雄も上機嫌でいろいろ話しをしたことと思う。静雄は聞く人を楽しませるためか、ほら話めいたことをいう癖があったようで、静雄から聞いた話として高木さんが書かれている「わしの祖母は和算家で、和算を解きながら歩いていて川に落ちて死んだ」などというのはどうもこの類の話であったようだ。松岡の祖先について静雄よりずっと詳しかった柳田の『故郷七十年』にもこのようなばかげたエピソードはない。ウイスキーを片手に、脇息によって話す静雄の話をかしこまって聞いている20代の高木さんの姿を思うとほほえましい気がする。高木さんは「2・26事件のときは時局について松岡先生にお伺いを立てようとする人の列が鵠沼海岸の駅まで続いた」と言われていたが、海軍退役後20年近くなる病床の静雄にそのようなことはなさそうで、静雄譲りのサービス話かなと思って聞いていた。

縁談話は多分気性の激しい静雄の気まぐれで立ち消えたものと思うが、よきご伴侶を得られて、長く連れ添われてほぼ同時に亡くなられたことを思うと、「伯父さん」になられなくてよかったのでは、とつい思ってしまう。ご冥福をお祈りします。

(まつおか たかし)

特集

鵠沼と高瀬家の百年

序章

高瀬彌一の祖父と父

渡部 瞭（会員）

1. はじめに

藤沢駅から鵠沼海岸へ向かう交通機関には、小田急江ノ島線のほかに〈こまわりくん〉というニックネームの小型路線バスを利用する方法がある。その停留所の呼称は、〈藤沢駅〉から〈橘通り〉〈郵便局前〉〈高瀬通り〉〈上岡〉〈中岡〉〈熊倉通り〉そして終点の〈高根〉である。すなわち、施設名・旧字名・道路区間の呼称の3種類が混在している。このルートを、文字通り私財をなげうち、独力で開通させたのが、〈高瀬通り〉のバス停に名を残す高瀬彌一だった。もっとも、現在このバス停があるあたりは、開通当時は〈宮崎町〉と名付けられており、〈高瀬通り〉とは、石上通り（旧江之島道）から分かれて、江ノ電石上駅脇の踏切を通り、旧秩父宮別邸に至るほぼ直線の区間を呼んだものらしい。

この高瀬彌一を中心とする高瀬家一族は、ここ100年の鵠沼の近現代史を知る上で避けて通れない存在だと思う。

では、その出自から探ってみよう。

2. 高瀬家の先祖=平家→三浦家→山口家

のっけからとんでもない話になるが、今年の歌舞伎界の話題に十一代目市川海老蔵襲名披露興行があった。市川家の襲名披露というと、歌舞伎十八番の内『暫』が演目にあがるのが定番らしい。話の内容はかなり荒唐無稽な荒事の代表だが、その主人公こそ「鎌倉権五郎」ということになっている。舞台上の権五郎はほとんど考えられないような派手な扮装と隈取りで出現する。歴史上の鎌倉権五郎は、

平安期に坂東に展開した平氏の一族で、本名は鎌倉景政（景正）。後三年の役で源義家に従い、若干16歳で片目を負傷しながらも勇猛な働きをしたことから伝説化した。江ノ電長谷駅の西方にある御霊神社は、別名を権五郎神社といい、彼を祀ったものとされる。

さて、歴史上で「鵠沼」の地名が最初に出てくるのは、『天養記』だということとは、6月の例会で学んだところだが、どういう形で出てくるかというと、

左弁官下す 伊勢大神宮司

且つは度々の宣旨に任せ、その妨げを停止し、供祭物を備進し、且つは国司子細を弁え申し、相模国田所目代源義朝並びに同じく義朝郎従散位清原安行、恣に謀計を巧らみ、大庭御厨高座郡内鵠沼郷を以て、俄に鎌倉郡内と号し、供祭料の稲米を運び取り、旁々濫行を致すに応ずる事

の箇所である。すなわち「鎌倉郡を治めていた源義朝らが、大庭御厨高座郡内鵠沼郷を、ここは鎌倉郡内だとイチャモンをつけて荒らし回った」という記事だ。この大庭御厨を拓き、伊勢神宮に寄進した人物こそ鎌倉権五郎こと鎌倉景政なのである。鵠沼郷、後の鵠沼村はその一部を形成していた。

『源平盛衰記』で知られるように、源頼朝というと、激しい源平合戦に勝ち抜いて征夷大將軍に任じられ、鎌倉に幕府を開いたことから、源氏と平家とは犬猿の仲のように思われがちだが、頼朝に従った坂東武者は、実は平家の流れを汲むものが多い。「鎌倉党」と呼ばれる鎌倉景政の子孫には大庭氏・俣野氏・梶原氏が出、祖先の係累からは秩父氏・畠山氏・河越氏、さらには千葉氏などが出ている。

そして、2001年度NHK大河ドラマ『北条時宗』で見られたように、北条氏と厳しく対立した末、宝治合戦で(嫡流は)滅ぼされる三浦氏は、鎌倉景政の祖父の兄弟から出ている(他にも諸説あり)。

この三浦氏の三浦義村の兄弟が鎌倉時代の初期に独立したのが高瀬家の本家である山口氏だとされる。この稿を書くにあたり、高瀬彌一の三女吉川八重子氏から提供を受けた古文書(題名不詳)によると、

抑 三浦大輔平義明第二子三浦平太郎義澄長子山口次郎有綱者山口家之元祖
也後山口荒治郎義達ニ至ル拾貳代間三浦ニ住ス (ルビ筆者。以下同様)

とある。三浦のどこに住んでいたのかを探ると、現在の三浦郡葉山町に上山口・下山口という地名があることにたどり着く。ここは1889(明治32)年4月1日に6村が合併して葉山村になるまでは上山口村・下山口村であった。おそらくこれが

山口氏12代の所領があった場所と考えられる。件^{くだん}の文書は続けて

其子山口義孝氏天正五年丑正月相州鎌倉ニ土着シ土ヲ去^{サリ}テ農ニ歸ス通名山口喜左衛門ト改稱ス^{スナハサ}則^ス農家之元祖也後累代繼續シテ現今拾陸^拾*代ニ至ル茲ニ^{ココ}山口義高氏者土農合テ貳拾捌**代之子孫也 *：拾陸=16 **：貳拾捌=28

と記している。天正五年というとは1577年だから、秀吉が小田原攻めを目論んでいたところである。関東一円はまだまだ後北条の勢力下にあった。山口義孝改め山口喜左衛門がなぜこの段階で武士の身分を捨て、帰農したのかは謎だが、住み慣れた葉山から鎌倉のおそらく十二所^{じゅうにそ}という山奥へ移住するのである。山奥とはいっても、十二所は「塩の道」として知られる金沢街道に沿った地だから、決して辺鄙な場所ではない。しかし、新たにここで農業をやってみようなどという気にはとてかなりそうもない場所柄だ。半分日陰になるような細長い谷戸田しか見られないような土地なのだ。追いつめられてたどり着くような、そんな所である。

さて、件の文書は、先に紹介した数行のあと、いきなり話題は幕末に移る。そこには山口義高という人物について詳しく紹介されている。つまり、この文書は山口義高の紹介文なのだ。そしてこの山口義高こそ、高瀬彌一の祖父である。

3. 高瀬彌一の祖父=山口義高

ここからはこれまでのように原文を紹介すると煩瑣になるので、要約して簡単に説明するに留める。

山口家はいつのころからかは判らないが、鎌倉郡十二所村の名主を務めていた。山口義高は1829(文政12)年1月15日に十二所村宇佐之小路771番地に名主=山口義勝の長男として生まれ、幼名を萬治郎といい、延之輔と改名後、晩年に義高を名乗った。8歳から寺子屋で学び、「帝國普通ノ學業ヲ修ム」とあるが、まだ明治以前で、どのような学業かは不明である。いずれにせよ18歳で百姓総代役に当選、21歳で年寄り役を引き受けたとあるから、周囲の人望も篤かったに違いない。さらに、1852(嘉永5)年には24歳で名主を受け継いでいる。時代は幕末から明治維新へ風雲急を告げていた。そういった時代の流れの中で、海防備場の人夫取締差配役やら、細川家預役所の支配やら、建長寺の貸付金取扱役やら、紀州家より千駄ヶ谷仙壽院に寄付された金のうち鎌倉本覺寺への貸付金取扱役やら、鎌倉を通過する官軍のための人馬賄い方総代やら、さまざまな役職をこなしていった。そして迎えた明治元年、鎌倉郡雪之下村組合十五ヶ村大総代役に就いた。

明治新政府が次々と新政策を繰り出していた明治5年、山口延之輔は何とも壮

大な計画をぶちあげる。相模川の水を與^よ瀬^せ(相模湖町)から分水し、5里20町余の用水路で引水し、相模原を開拓して7000町歩の畑地を灌漑しようというものであった。陸軍による近代測量に基づく地図が出る10年も前だ。計画は神奈川県・足柄県に出願され、両県の係官立会の許で実地検証がなされ、内務省に伺いを立てるという段階まで進んだが、どうやら資金調達の上で暗礁に乗り上げたらしい。

この計画完成の暁には、更にいくつかの計画が予定されていた。一つは帷子川^{かたびら}の河谷を通る水路を設け、山梨県郡内地方(原文では駿甲兩國とあるが、駿河は方向が違う)と横浜とを結ぶ通船経路計画であり、もう一つは鵠沼村の海岸付近の平地に相模原灌漑の末水を引き入れて田地を開発しようという目論見である。ことに後者は高座郡鵠沼村關根傳左衛門ほか1名が発起人となっているから、相当本気で考えていたらしい。關根傳左衛門とは、宿庭の普門寺横に屋敷を構え、「大關根」とも呼ばれる關根本家の明治初期の当主の名である。

この計画は、わが国最初の近代上水道といわれるパーマーによる横浜水道着工に先立つこと13年、相模ダム建設を中心とする「相模川河川統制計画」スタートに先立つこと66年、そして、この計画の小型版といえる「相模原畑地灌漑計画」着工に先立つこと実に76年である。「ハタカン」と略称される「相模原畑地灌漑計画」は、その完成時には灌漑すべき畑地の大部分が宅地や工業用地になり、ほとんど何の役にも立たなかったという皮肉な結末で知られる。

冒頭に紹介し、後に詳述することになる高瀬彌一の「鵠沼新道」計画や江之島水道計画で、われわれは時代を先取りする彌一の姿に感心するのだが、この祖父の壮大な計画にはとてもかなわない。ただ「血は争えないものだな」という感想を持つのみである。

ところで、山口義高(延之輔)のその後はどうなったか。件の文書は明治6年の6月31日寒川神社権禰宜兼権少講義、同年12月1日に神奈川県中教院庶務兼会計課長に就任し、明治9年3月1日に鎌倉郡十二所神社宮司を引き受けたことを紹介したところで終わっている。彼がいつ死去したのかも記されていない。ということは、この文書が彼の生存中に作成されたのであろう。

ともあれ、相模原開拓についてはかなり詳しく書かれているにもかかわらず、それ以後の記述はいかにも素っ気ない。鎌倉郡雪之下村組合十五ヶ村大総代役まで務めた大人物が、十二所神社宮司で生涯を閉じたのであろうか。

何やら、後に記すことになる高瀬彌一の生涯と重なるものが読みとれるような気がしてならない。



高瀬彌一の両親

右：高瀬三郎
(1858-1916)

左：高瀬キク
(1861-1936)

『ゆく河の流れ』
より

4. 高瀬彌一の実父=高瀬三郎

2、3項で引用した山口義高(延之輔)を紹介する古文書には、彼の家族については触れられていない。父の名が判るのみで、妻子については一行の記述もない。故高瀬彌太郎(彌一の長男)が作成したといわれる高瀬家の系図に従えば、山口義高(延之輔)には少なくとも2人の男子がいた。妻の名は判らない。長男を高重(山口喜左衛門)といい、二男を三郎といった。

ここで疑問に思うのは、高瀬笑子氏(彌一の長女)の著書『鵠沼断想』に「山口の大叔父」と紹介されている山口寅之輔である。寅之輔は彌一と年齢はあまり離れておらず、時折鵠沼に現れて高瀬家の家族と片瀬川で舟遊びをした様子などが紹介されている。大叔父というからには、三郎の弟で彌一の叔父ということになるはずだが、先述の系図では高重、(山口喜左衛門)の一人息子=高久(山口寅之輔)と書かれていて、山口家の系譜についてはこの人物までが記されている。すなわち、三郎の甥で彌一の従兄弟である。しかし、高瀬三郎氏(彌一の三男)、吉川八重子氏(彌一の三女)の記憶でも、笑子氏と同様の大叔父という位置づけなのである。寅之輔という名といい、年齢差といい、山口家の嫡流と考えるのが自然なような気がするが、ここであれこれ詮索しても結論が出せるわけもないので、後の研究に委ねるとして、ここでは2説あることを紹介するに留めたい。

さて、三郎である。

山口三郎は、1859(安政6)年1月13日、鎌倉郡十二所村名主=山口義高(延之輔)の二男として、鎌倉郡東鎌倉村十二所で生まれた。

先頃吉川八重子氏から明治43年に横濱商況新報社から刊行された『横濱成功名

誉鑑』の『奮闘的の商傑、高瀬三郎君』と題する記事のコピーを頂いた。現在のところ、彼の生存した時代における紹介記事としては唯一のものなので、これを根拠に紹介していきたい。

(前略)高瀬三郎君は相州鎌倉に生れ、明治三年横濱に出で、修文館にて漢學を修め、七年東京外國語學校に於て獨逸語を學び、官費生となりて東京大學醫學部に入りしが、滿心の羈氣到底刀圭を以て立つを肯んぜず、斷然中途に退學し一時遞信省御用掛となりしも暫くにして之を辭し、明治十二年獨商アーレンス社に入り、主として輸入貿易を擔任し成績大に見るべきものあり、どうも、明治時代の記事の文章は読点ばかりで句点がなく、どこで区切るべきか悩む。これでも1フレーズの5分の1程度である。

横浜修文館とは、幕末の開港期に横浜に開校した漢文研修所だったが、戊辰戦争の傷病兵を収容するための軍陣病院としてその建物が使われ、W. Willis(英国人医師)らがここで治療にあたった。軍陣病院の部分は後に独立し、現在の横浜市立大学病院にまで伝統が引き継がれる。漢文研修所には明治に入ると英文研修所が併設され、全国から多数の俊英が集まった。後に神奈川県師範学校となる。

東京外国語学校は1973(明治6)年に創立した現在の東京外国語大学の前身である。三郎がなぜドイツ語を学んだのか。多分医学部進学を目指してのことであろう。結局医学部は中退するが、後にアーレンス社では役立ったに違いない。

医学部中退の理由を、この記事では「滿心の羈氣到底刀圭を以て立つを肯んぜず」などと格好をつけているが、高瀬笑子氏の『鵠沼断想』では「学費がつづかなかった」と記している。高瀬家に伝えられたこの説が実態であろう。

ここまでが山口三郎の時代である。1883(明治16)年4月28日、彼は高瀬家の養子となり、高瀬三郎を名乗る。養子とはいっても、おそらく高瀬家とは元来縁がなかった。高瀬家から請われて養子になったのではない。役職上知り得た情報により、高瀬家が絶えることを利用したとされる。なぜ養子になったのか。笑子氏は徴兵回避を理由に挙げておられる。明治新政府は、1973(明治6)年1月に徴兵令を敷いた。しかし、はじめは戸主、嗣子など家父長制の中心になる者、また、官吏や官公立学校生徒、「代入料」として270円を上納した者は兵役を免除されていた。この制度は、1889(明治22)年1月の改正徴兵令によって廃止され、国民皆兵の時代となった。

次いで1886(明治19)年3月9日、高瀬三郎は横浜・金沢の名主の出である淺葉キクと結婚・入籍する。そして1887(明治20)年7月28日に長男=高瀬彌一が誕生、

1889(明治22)年9月19日には長女=照、1892(明治25)年2月17日には二女=千代、1894(明治27)年3月25日には三女=喜美が次々に誕生した。

廿七年同志を糾合して横濱貿易株式會社を起し其取締役となり、アーレンス其他の外商と聯絡して輸入品賣買に従事せしが、二十八年十一月日清戦後の好機運に乘じ、本町四丁目に高瀬商店を設立し、陸海軍其他諸官衙に對する物品の供給及び一般の輸入品賣買並に仲立業に従事せり、豪放なる君は未だこれのみを以て満足せず、越へて卅二年改正条約實施新關稅法の施行に際し、千載一遇の好機我をして陶朱たらしめんか、將た我をして赤裸々に反へらしめんか、丈夫須らく手に唾して立つべしと、雄大なる策戰計畫一舉して見越輸入の酒精を羅致し、同時に現在品を賣収して獨力利益を壟斷せんことを企て、あらゆる方法の下に資金を調達し、實價數百萬圓の貨物を買収せり、果然、畫策的中し、市價次第に奔騰し一舉殆んど百余萬圓を利せんとす、勝算歴々眼中にあり、君滿腔の得意正に此時に在りき、

この、1894(明治27)年からの数年間が高瀬三郎にとって絶頂期であつた。独立して起業した彼は、アーレンス社で手中にした貿易業のノウハウを遺憾なく發揮し、たちまちにして巨万の富を築き上げた。売りに出ていた横浜正金銀行の石造の建物を買い取り、別荘として由比ガ浜に移築したのもこの頃である。家族には1900(明治33)年9月5日に四女=松が生まれた。

而して天公は什麼に惡戯を弄するぞ、時運一轉、卅四年に到り北清の天地倏忽慘憺を極め、迅雷耳を掩ふに遑あらず、經濟社界の恐慌は劈頭銀行の警戒となり、資金回収の大勢は滔々として席卷し來れり、鬼神の如き猛將も糧道を斷たれては如何ともすべけんや、孤城落日苟くも其膽斗大なるにあらずんば實に自滅を免れず、君斷乎時運の非なるを諦視し、悠揚迫らず憾を呑んで徐ろに善後の策を講じ、敗軍の將又兵を談ぜず、姑らく湘の鵠ヶ沼に隱退せり、

20世紀を迎えたころから、業績にかげりが見え始める。1901(明治34)年7月16日には破産状態に陥る。こうした時期に三郎は鵠沼に土地を求め、横浜から転居した。上記文書に見る「湘の鵠ヶ沼に隱退せり」である。当時中藤ヶ谷と呼ばれた片瀬川に沿う砂丘一帯、約2万坪といわれる土地を入手したのは1902(明治35)年3月4日のことであつた。この土地の西に沿って江之島電気鉄道が開通するのは、その年の9月1日のことだから、既に工事が始まっていたであろう。笑子氏は「江ノ島電鉄にも、祖父はいくらか関係していた」と書いておられるが、同社

の有力株主の中に高瀬三郎の名は見あたらない。地目が山林であるにせよ、当時鵠沼海岸別荘地の1区画は、せいぜい3000坪であったことを考えると、約2万坪という面積は尋常ではない。それも事業に失敗し隠遁生活を送るために購入した土地なのだ。

最近、有田会長が入手された旧土地台帳の写しを見て、驚くべきことが判った。鵠沼村中藤ヶ谷7200番地の広大な山林の購入者は高瀬彌一^{だおう}なのである。当時彌一は14歳、神奈川県立中学校(略称=神中。後に県第一中学→県立第一中学→県立第一横浜中学→県立横浜第一中学→県立横浜第一高校→県立希望ヶ丘高校と改名)の生徒だったはずだ。彌一少年の名義で購入した理由は、債権者や税務署からの財産隠しであろう。

静養三年、卅七年二月創痍全く癒ゆるや、捲土重來^{だおう}拿翁*の孤島を脱せしが如く、横濱の舊壘を修め、南仲通五丁目に高瀬合資會社を設立して、再び貿易仲立業を開始し、其信用も亦舊に倍するに至れり、卅八年十二月滿韓地方を視察し歸來更に計畫の歩武を進め、現に太田町四丁目に移轉せり、君の經歷と手腕は素より論を俟たず、而かも輕々に手を下さず、今や孜々として専ら本業に鞅掌し、徐ろに世の形勢を注視して機運の到るを待つものゝ如し、

*：拿翁=ナポレオン

高瀬家が横浜から鵠沼に転居した時期は、今のところ判然としない。上記文章では「静養三年、卅七年二月創痍全く癒ゆるや」とあるが、明治37年の3年前は明治34年だから、まだ土地を入手する前だし、江ノ電も開通していない。一方、戸籍上では明治43年6月21日付で横浜市太田町4丁目75番地から中藤ヶ谷7155番地に転籍届が出されている。これは同年7月12日付で照への分筆手続きがなされているから、書類手続き上の問題とも考えられる。

五女=芳は、1903(明治36)年10月4日に誕生し、横浜で出生届が出されている。従って、この時にはまだ横浜に住んでいて、その後に鵠沼に移住したと考えるべきであろう。

ともあれ、高瀬家が鵠沼に居を移してからほぼ百年と見て良からう。それは、江ノ電藤ヶ谷停留所前から坂道を登り、見上げるような冠木門を潜ってたどり着く《鵠沼御殿》と噂される豪邸から始まった。どのような屋敷であったのかは、伊藤 聖会員が『鵠沼』87号で紹介しているので、参照されたい。そして、そこを舞台に繰り広げられた人間模様については、これも伊藤会員が次章で詳述することになる。

(わたなべ りょう)

高瀬彌一と大正教養派

伊藤 聖 (会員)

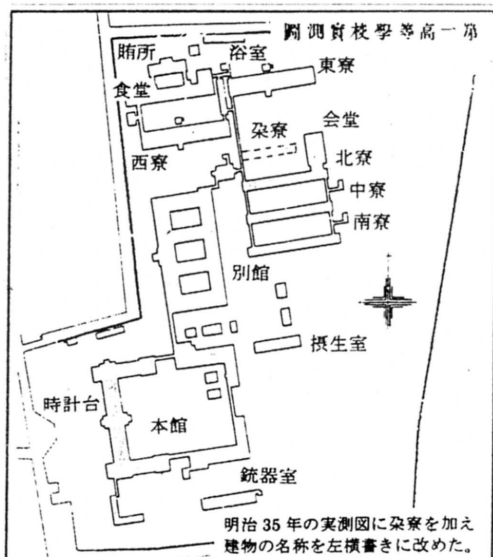
1. あこがれの一高入学

明治 40 年 (1907) 9 月、数え年 21 歳の高瀬彌一 (1887—1954) は神奈川県立第一中学 (いわゆる神中) を卒業、天下の難関と謳われた旧制第一高等学校 (以下、一高と略す) の英法科・文科 (英法文科ともいう) に入学した。

当時、一高は東京の本郷区向ヶ岡弥生町にあったので、学校・寄宿寮をあわせて「向陵」(陵は大きな岡の意) とも呼ばれていた。現在の東大農学部のあるところで、ここに時計台のある本館と別館、東寮・西寮・中寮・南寮・北寮の 5 寮が並んでいた。明治 35 年に作られた寮歌「嗚呼玉杯に花うけて」の一節に「向ヶ岡にそそり立つ 五寮の健児意気高し」は、これを受けている。

一高の学制は 1 部、2 部、3 部に分かれ、1 部には英法科・文科、独法独文科、仏法仏文科の 3 科があった。2 部は工科、理科、農科で、3 部は医科であった。3 年になると 1 部は、英法科、独法科、仏法科、文科の 4 科になった。

彌一の 1 学年上級の英法科・文科には、のちに彌一の義弟になる和辻哲郎 (1889—1960) や坂 順三がいた。



一高時代の在寮記録（明治39年～42年）

明治39年	明治40年	明治41年	明治42年
和辻 哲郎（東1）	大貫雪之助（東4）	永野 護（東7）	高橋 胖（東1）
末弘巖太郎（東2）	天野 貞祐（東14）	神川 彦松（東13）	永野 護（東2）
戸田 貞三（東3）	廣瀬 忠久（西5）	森戸 辰男（東16）	柳澤 健（東4）
小泉 鐵（東3）	森戸 辰男（西7）	河合榮治郎（西17）	大達 茂雄（東7）
辻村 伊助（東12）	今井登志喜（西18）	関口 泰（西18）	河上丈太郎（東16）
天野 貞祐（西7）	和辻 哲郎（中3）	矢代 幸雄（中2）	河合榮治郎（東16）
高橋 里美（西8）	末弘巖太郎（南1）	南原 繁（中7）	安井誠一郎（西3）
関口 泰（中1）	関口 泰（南7）	亀山 直人（中9）	豊嶋與志雄（西3）
安川第五郎（中1）	亀山 直人（南8）	安川第五郎（南6）	近衛 文麿（西17）
金森徳次郎（中3）	南原 繁（南8）	戸田 貞三（北4）	関口 泰（西18）
津島 壽一（中7）	太宰 施門（北1）	和辻 哲郎（北4）	神川 彦松（中7）
石坂 泰三（南1）	金森徳次郎（北4）	大貫雪之助（北5）	賀屋 興宣（中7）
今井登志喜（南7）	谷崎潤一郎（栄1）	賀屋 興宣（北10）	森戸 辰男（中8）
大貫雪之助（南8）	津島 壽一（栄1）	田中耕太郎（栄6）	田中耕太郎（南1）
岩下 壯一（南10）		柳澤 健（栄6）	亀山 直人（南2）
白鳥 敏夫（北10）			石渡荘太郎（南3）
勝沼 精蔵（栄2）			山宮 允（北1）
			太宰 施門（北5）
			南原 繁（栄1）

和辻は明治39年9月、姫路中学から首席で一高に入学、東寮一番の部屋で寮生活を送っていた。和辻は3年間を通して寄宿寮に入っていたが（上掲の表参照）、現在残っている寮生名簿（注1）に高瀬彌一や坂順三の在寮記録はない。一高は明治34年から皆寄宿制になり、同37年には^ぎ栄寮ができて6寮になっていたが、入寮は必ずしも強制的ではなく、「実際には、常時、概ね二割ないし三割の生徒がさまざまな理由で許可を求め、通学した」（『一高自治寮六十年史』p.74）という。

明治41年2月、立澤剛（のちに一高教授）らとともに文芸部委員になった和辻哲郎は『校友会雑誌』174号に「精神を失ひたる校風」と題した一文を寄稿した。前記『六十年史』によると「自己心霊（精神）の尊厳を説き、籠城主義（皆寄宿制）を否定し、その因襲的悪習には耐え難いものがあると強調している」（p.83）ものであったという。この論文の反響は大きく、とくに運動部員は猛反発して、4月には和辻殴打事件まで起きた。

入学してまだ半年の彌一は、自分より年少ながら華々しく活躍する上級生をみて瞠目したことだろう。当時の一高生は学年全体で300人足らずだったから、顔を合わせることもあったと思われるが、一高時代の哲郎と彌一を結びつける直接的な関係は見出せない。

和辻は3年になると文科に進み、明治42年7月一高を卒業した。一緒に卒業した文科の同級生21人のなかには、天野貞祐、九鬼周造、大貫雪之助（晶川）、^{まがね}児島喜久雄、戸田貞三、小泉鐵、岩下壯一、立澤剛らがあり、多士済々だった。

和辻は明治 42 年 9 月、天野貞祐、九鬼周造らとともに、東京帝国大学文科大学（現在の東京大学文学部）哲学科に進んだ。高瀬彌一は翌 43 年 7 月、一高を卒業して帝国大学法科大学（現東京大学法学部）に入った。田中耕太郎（のちに最高裁長官）は彌一より 1 年後に法科大学に進み、お雇い教師のシュテルンベルクというユダヤ系ドイツ人講師から「ドイツ法制史」を学んだ。シュテルンベルクは大正 7 年、帝大を契約満了で解雇されたが、ナチス台頭期のドイツには帰れず、田中ら（おそらく高瀬彌一も含めて）の世話で鵠沼に住むことになる。

彌一の履歴に「法学部卒業後、文学部に学士入学、大正3年国文科を卒業」と書かれることがあるが、これには疑問が残る。法科大学と文科大学を卒業した辰野隆は「法、文」と両方が一高同窓生名簿に記載されている。もし彌一が両方出ていれば名簿にも「法、文」と書かれたはずである。おそらく彌一は法科大学に入ったものの、翌44年文科大学に転じ、大正3年国文科を卒業したものと思われる(注2)。

下條貞彦	長野	○	死亡	龜町區有樂町一ノ二
鈴木敬一	愛知	法	警視廳保安部長	死亡
鈴木多喜治	千葉	法	○	死亡
關口泰	靜岡	法	東京朝日新聞社	東京市外大井町金子六二一六
田阪一	愛媛	法	三菱合資會社	在外宅赤坂區青山南町五ノ八一
田村鐵輔	東京	法	三井合名會社	赤坂區青山南町二ノ二六
高濱彌一	東京	文	地主	神奈川縣鶴沼二三七〇
竹林恒三	岡山	法	○	○
館智二	富山	法	內閣官房總務課	龜町區永田町二ノ一四內閣官會
玉井忠一	青森	法	東京控訴院判事	東京府世田ヶ谷町池尻三六九
土屋長一	靜岡	法	三井信託會社	赤坂區青山南町五ノ四五一
中原庸	鳥取	法	三井銀行調查課	東京市外大井町林附三三四
中屋重治	福岡	法	臺灣總督府中央研究所	臺北市文武町四ノ四
南原繁	香川	法	東大法學部教授	東京市外下落合町七〇二
桂川角之助	東京	法	辯護士	大阪市天王寺區上本町七丁目
日淺寬	愛知	法	札幌鐵道局參事運輸課長	札幌市北九條東五官會
樋口實	山梨	法	三菱合資會社地所課	本鄉區駒込神明町五七

『鵠沼』87号の「藤ヶ谷にあった高瀬邸」のなかで夏目漱石が「神奈川県鵠沼七千二百番地」（藤ヶ谷）の和辻あての礼状を出したと書いたが、当時は「神奈川県鵠沼」で郵便物が届いたのである。

2. 和辻哲郎との出会い

和辻の大学卒業に際して、彌一は「卒業論文を書くのなら、うちの離れが空いているから、鵠沼に来て書かないか」と誘った。明治44年の秋であった。このいきさつについて、彌一のすぐ下の妹で、のちに哲郎の妻になった高瀬^こ照は『和辻哲郎とともに』（新潮社、昭和41年11月）のなかで次のように書いている。

「兄は大学生だった間のひと頃、赤門前の蓋平館という大きな下宿屋にいた事があった。多分そこへ引越して間もなくの事だったのだろう。ある時、「僕の部屋の真上が和辻の部屋なのさ。驚いちゃった」と話して私を驚かせた。兄は学級は違ったのだが、そんな事から親しくなったのか、その秋、「和辻が卒業論文を書くのに静かなところへ行きたいと言っているが、うちの離れを貸してあげてくれないか」と父に頼んで来た。父はもともと学生好きで、それまでにも度々、兄の友人の大学生を、多い時は一度に三四人も泊めて面倒をみたりしていた位なので、^こ快く承諾した」（p.10）。

当時、本郷の一高、帝大周辺には学生相手の下宿屋が何十も軒を並べていた。蓋平館（注3）もそんな一軒で新築の木造3階建て、通学するのにも、遊ぶにも便利だったが、出入りする学生が多く、卒論に集中するには難があった。11月初め、和辻は鵠沼にやって来て高瀬邸の客となった。このとき和辻が滞在した離れが、『鵠沼』87号p.43の航空写真では母屋に近い離れCで、6畳と8畳の二間^{ふたまた}があったことは、すでに述べたので繰り返さない。

事業に失敗して横浜から鵠沼の松林の中に引退したといっても、彌一の父高瀬三郎一家の暮らしぶりは、地味な性格だった哲郎の想像を超えるものであった。いわゆるハイカラな都会の小市民生活が、鵠沼別荘地にあった。そのころ三郎は「隠居仕事」といいながら横浜に事務所を作り、鵠沼から毎日通勤していた。

照は「料理も昼はあっさりした和食を、母の指図で女中達が作っていた様と思う。それに引きかえ夕食は、横浜の店から父が帰り、小さい妹達も混じって賑やかだった上に、料理の品数も多かった。父はご馳走ずきで洋食いきだったから、コックも張り切って活き活きと腕をふるった。この、家庭の洋食は、洋食屋の洋食にだけなれていた客を、殊の外喜ばせたらしかった」（和辻照『和辻哲郎とともに

に』p.15、以下この本からの引用は「前掲書」とする）と書いている。こうして哲郎は高瀬家の客になり、雑事に煩わされることなく卒業論文に専心した。

翌45年3月、卒論がまとまりかけたころ、照は母にいいつけられて離れの部屋の掃除に行った。外に出された哲郎の机の上には、大判の洋罫紙に書かれた卒業論文が載っていた。タイトルは「On Schopenhauer's Pessimism and Salvation Theory」（ショウペンハウエルの厭世主義及び解脱論に就いて）であった。哲郎はケーベル先生に出すために英語で論文を書いたのだった。

部屋に戻ってきた哲郎は「もっと近くへ来てください。話があるのです」と照を坐らせ、真面目な顔で膝に手を置いて「僕と結婚して下さいませんか」といった。蒼いほど白い顔だった。照は深々とうなずいた。それから、やっとなつづれたような声をだして「ええ」と返事した。

明治45年6月27日、二人は京都平安神宮で式を挙げ、新居を大森山王2600番地に構えた。当時、帝大の卒業は7月だった。哲郎は7月10日、文科大学哲学科を卒業、引き続き大学院でニイチェ研究を続けることになった。哲郎はもともと卒業論文をニイチェにしたいと思っていたが、主任教授の井上哲次郎の許可が得られなくて、やむなくショウペンハウエルに代えたのだった。それ以来のニイチェだったのだ。1年後の初夏、それは脱稿して『ニイチェ研究』（内田老鶴圃、大正2年10月）として実を結んだ。哲郎の最初の著作だった。

大正3年2月、長女京子が生まれた。そして1年半ほどたって京子が可愛い盛りになったころ、晩年になった三郎は、孫の京子を身近に置きたくなったのか「鵠沼に来て住まないか」と提案した。こうして和辻一家は同4年9月、再び高瀬邸に住むことになる。このとき住んだのが屋敷の北西にあった離れBであったことも『鵠沼』87号で述べた。

離れBは母屋から150メートルほど離れていた。照は次のように書いている。

「^実家の隣といっても実家の松山つづきに一二町は離れていて、山の中の淋しい一軒家だった。父の知人のある銀行の頭取が、私の地所の奥まった片端を借りて建てたもので、「和洋折衷とでもいうのかねえ、あまり感心しない建築だが」と父は言っていた。天井が高く窓が小さく、青ペンキ塗りで、外見はすっかり西洋館なのに、中は畳敷きの日本座敷で、茶の間の八畳には古風な炬燵さえ切っ

ってあった」（前掲書p.68）。

ここで「私の地所」と照がいつているのは、この一区画が、いつのころからか照の名義になっていたからである（注4）。その後、この家で刃傷事件があり、病

院から退院してきた銀行家がもう住む気になれず、空き家になっていたのを三郎が買い取り、家もまた照の名義になっていた。この離れと土地は、照たちが鵠沼から離れたとき、三郎の末弟の山口寅之輔が希望して買い取った。『鵠沼』87号で書いたように、高瀬笑子さんが「幼時、大叔父の山口寅之輔をBに訪ねた記憶がある」のは、このことを裏付ける。

離れBの外観が洋館に見えたことは、安倍能成^{よししげ}（1883-1966）が『我が生ひ立ち』（岩波書店、昭和41年11月）で「和辻君の家といふのは、高瀬氏の邸の後に、砂道を二町ばかりいつた所にある。木造の洋館で、その道にはねむの木があり、向ふに片瀬川の流が見えた」（p.513）と書いていることから分かる。

谷崎潤一郎も雑誌『心』に「家は非常に天井の高い、十五六畳も敷けさうな広間になってみて、西洋館に畳を敷いたやうな建物であつた」（前掲書 p.69）と記している。東屋にいたころ谷崎は何回か、一高で後輩の和辻を訪れていて、この文の末尾には「芥川龍之介も一度私に同伴して行ったことがあつた」と書いてある。この「一度」は芥川書簡の大正6年5月31日であろう（注5）。このころ芥川は鎌倉に住んでいて横須賀の海軍機関学校の教官をしていた。

外観が西洋館に見えたばかりでなく、この家には屋根裏部屋まであつた。照のいうところでは「三坪ほどの屋根裏部屋で、以前の人は物置に使っていたらしい。小さな窓が南北に二つずつあるだけなのと、戸外^{もと}から階段をあがって行くのが不便なためとで、その後私達は全然使っていなかったものだ」（前掲書 p.181）。

こんど改めて『鵠沼』87号の航空写真をみたところ、切妻になった屋根は南北にのびているから、そこに明かり取りの窓が二つずつあつたのだろう。

その屋根裏部屋を阿部次郎が貸してくれとって、10日か20日ほど原稿を書きに來たことがあつた。いつのころか書いてないが、照らが離れに住むようになって半年余あとの大正5年5月のことと思われる（注6）。夜だけ下の部屋に寝て、食事と一緒にとり、京子をあやしたりした。照が髪を洗って乾かしているときなど、次郎の目が「まぶしくて（照は）頬を染めた」（前掲書 p.183）という。

下の部屋というのは照も書いているように、8畳の茶の間のほか、大きな15畳の部屋があつて、ここを哲郎は書斎として使っていた。

「ここに引き移って間もなくだったと思う。片隅に机と本箱を置いただけの、殺風景な十五畳の書斎に二人で坐って、『ゼエレン・キエルケゴオル』の奥附に判を押していた日があつた。印形は、この本のために哲郎が自分で彫ったもので、それに緑色の油絵の絵具をつけて、哲郎が一枚一枚丹念に押して行った。

それを私がまた一枚一枚宝物のように大切に受取って、濡れている絵具が擦れないように丁寧に拭いて畳の上に並べて行った。二人はものも言わずに仕事をしていたが、時々ふっと目が合うと、ひとりでに笑顔になった。『ニイチェ研究』を出してから丸二年、同じように精魂をつくした勉強を続けて書きあげたのであった。大正四年十月十五日同じ内田老鶴圃から出版した」(前掲書 p.70)。

この描写は、初々しい二人の鵠沼生活を語ってほほえましい。

哲郎は以前にもまして「一日十時間ほどずつ、毎日頭を働かせて」勉強に集中していた。「大森の家でも言ったと思うが、僕はやっぱり文化史のようなものがやりたいんだ」と、のちに『古寺巡礼』や『風土』につながっていく仕事を、しっかりと見据えていた。身につけた哲学的な思考のうえに、もっと広く人間の文化の営みを見ていこうとするものだった。大正6年5月に訳書『ニイチェ書簡集』を岩波書店から出版、これが鵠沼で出た2冊目の著作であった。

大正6年12月20日、三郎は胃がんで亡くなった。照たちをそばに置きたかった父が亡くなって、一家は東京に移り住むことを考えはじめる。東京での用事も増えていた。同7年6月、和辻一家は2年10か月の鵠沼生活を終え、安倍能成の世話で東京の芝三田に転居した。

3. 阿部次郎と『三太郎の日記』

阿部次郎(1883—1959)は一高と帝大哲学科で哲郎の5年先輩であった。山形中学から東京の京北中学を経て、明治34年一高に入学、文芸部委員として活躍した。同40年に帝大を卒業して、夏目漱石が健筆をふるっていた東京朝日新聞に次々と論考を発表して、新進の研究者として注目され始めていた。

まだ和辻哲郎と照が、新婚の家を大森山王に構えていたころ、次郎も大井町森に住んでいた。照は初めて紹介されたときのことを次のように書いている。

「私共が、最初の家の大森に住んで半年ばかり経った頃、大正元年の晩秋だったかと思うが、ある晴れた日の午後、私達はいつもの散歩道をずっと先の方まで歩いて行った。畑道、田圃道、小川添いの土手道などを通して、二十分ほど行ったろうか、農家の小さい離れ家の縁先に立った。そこがB(注、阿部のこと)の下宿している家だった」(前掲書 p.178)。

帰りの道で哲郎が「どう？ 感じのいい人だろう？」といった。照がうなずくと、「僕はあの人が好きなんだ」と哲郎はつけ加えた。照が「私も好きよ」というと「そうか。そりゃよかった」と哲郎は嬉しそうな声を出した。こうして哲郎と

照、次郎の交流が急速に深まっていく。しまいには大森の家に次郎が泊まっていくこともあった。

『三太郎の日記』は阿部次郎の名を一躍、江湖に知らしめた著作であるが、その第一部は大正3年4月に東雲堂から刊行された。これは「自分の悲哀から、憂愁から、希望から、失望から、自信から、羞恥から、憤激から、愛から、寂寥から、苦痛から促されて」（自序）書いた内面生活の最も直接的な記録であった。当時は西田幾多郎の『善の研究』、倉田百三の『愛と認識との出発』などとともに、旧制高校生の読むべき教養書としてトップにあげられていた。

その出版と前後して、おそらく和辻から高瀬邸で卒論を書いた話を聞かされてのことだと思われるが、次郎は「自分も鵜沼に籠もって次の著作をまとめてみたい」という希望をもつようになる。次郎もそのころは結婚していたが、「道を求めるために妻子を遠けて庵室に籠る僧侶の心持」（『阿部次郎全集』16巻「書簡集」p.94）で鵜沼にやってきたのは大正3年5月早々のことだったようだ（注7）。この「僧堂」は和辻哲郎が卒業論文を書いた離れCであった。

阿部次郎は当時、慶応大学講師として美学を講じていたから、週一回は上京しなければならず、鵜沼に籠もりきりになるという訳にもいかなかったが、高瀬邸の滞在は断続的ながら大正4年5月末まで約1年間つづいた。ここで次郎はトルストイの翻訳を進めるとともに、『三太郎の日記』の第二部にあたる諸編を書きついでいった。

高瀬家をめぐる人々（1）		1911年（明44）	1912年（明45大1）	1913年（大2）	1914年（大3）
	高瀬 彌一 （1887-1954）	9. - 帝大文科大学に転科？	10. 31 高瀬千代、坂順三と結婚		7. - 帝大文科大学を卒業
	和辻 哲郎 （1889-1960）	C 11. 初 卒論を書くため高瀬邸に滞在	6. 27 高瀬照と結婚、大森山王に住む 7. 帝大哲学科を卒業	10. 1 『ニイチエ研究』	2. 15 長女京子生まれる
	阿部 次郎 （1883-1959）		秋 大井町森に住む、和辻と交流盛ん		C 4. 『三太郎の日記』（1） 5. - 高瀬邸の離れに住む
	安倍 能成 （1883-1966）		10. 22 藤村恭子と結婚		6. 7 長男亮生まれる
	中 勘助 （1885-1965）	6. - 病気のため除隊、野尻湖畔に転地 冬 千駄ヶ谷に寄寓	夏 野尻湖畔で「銀の匙」（前編）を執筆 10. - 寛永寺の塔頭に寓居	4. 8 漱石の推輓で東京朝日新聞に「銀の匙」連載	夏 比叡山恵心堂で「銀の匙」（後編）を執筆
	茅野 雅子 （1880-1946）	茅野夫妻、明治41年から京都に住む			

大正4年6月に岩波書店から刊行された阿部次郎の『第二 三太郎の日記』は、次の11章から成り立っていた。

- 1、思想と実行 (5.17) 2、理想と実現 (5.17) 3、遅き歩み (5.28)
- 4、形影の問答 (5.28) 5、聖フランシスとステンドール (6.5)
- 6、愛と憎と (6.7) 7、意義を明らかにす (6.8) 8、郊外の晩春 (3.26)
- 9、蝦と蟹 (6.20—9.5) 10、Aに【原題「安倍能成に」】(8.13)
- 11、砕かれざる心 (11.28) このうち、8. だけが鶴沼での滞在以前のものである。

のちに岩波書店から、一部、二部、三部をあわせた『合本 三太郎の日記』が大正4年6月出版されて、この本は大正教養主義の教科書として広く読まれた。しかしこれには、阿部次郎が和辻哲郎の外遊中、京都にいた照を尋ねてきて告白したように、その底流に照への感情が秘められていた。「あちこちいろいろ変えてもあるし、まぎらせてもあつて」(前掲書 p.193) 照は少しも気づかなかった。ほかのだれか次郎の好きな人でもいるのだろうと思っていた。

この「京都事件」が、のちに和辻と阿部の決定的な絶交状態につながっていくのだが、このころはまだ二人の友情はゆるぎなく、『偶像再興』(岩波書店、大正7年12月)には「鶴沼の松林と砂丘との間に送りしさまざまの日の思出にこの書を阿部次郎 安倍能成両君に献ず」と献辞がつけられている。

この書は「ニーチェやキェルケゴールへの関心から仏教美術や日本文化への関心に移り行く時期の記念」(版を新しくするに当りて)として、和辻の鶴沼時代を

1915年(大4)	1916年(大5)	1917年(大6)	1918年(大7)	1919年(大8)
	4. ? 藤嶺中学教諭 12.20 父三郎死去	9.1 長女笑子生まれる		6.29 長男彌太郎生まれる 10.22 川袋の土地を購入
B 9. - 高瀬邸に住む 10.15 『ゼエレン・キェルケゴール』		4.21 『思潮』創刊準備 5.1 「思潮」同人となる 5.31 谷崎、芥川と来訪	6.初 高瀬邸を去り三田綱町に転居 12.20 『偶像再興』	5.23 『古寺巡礼』
5.末 高瀬邸を去る 6.18 『三太郎の日記』(2) 10. - 「哲学叢書」編集	B 5.2-20 和辻宅に滞在 8.14 和辻・安倍宅で会合、「思潮」の名を決める	1.22 安倍宅で会合 4.21 和辻宅に1泊 5.1 『思潮』を主宰	6.5 『合本三太郎の日記』	1. - 『思潮』廃刊
3. - 恭子、猩紅熱を患う	G 3. - 高瀬邸に住む 4. - 慶応大学予科講師	? 1.22 和辻、小宮ら集まる 3.25 次男浩二生まれる 5.1 「思潮」同人となる	3. - 高瀬邸を去り小石川小日向水道町に住む	3.11 長女道子生まれる
4.17 「つむじまがり」(「銀の匙」後編)朝日新聞に連載	E? 夏 高瀬邸の離れで一夏を過ごす	5. - 茨城徳満寺に寄寓	4. - 東大寺の塔頭に寓居 7. - 茨城県徳満寺に寄寓	7. - 母と共に小石川小日向水道町に住む
	5. - 茅野雅子、阿部能成を訪ね、茅野蕭々の東京転任を依頼	1. - 雅子歌集『金沙集』 4 - 茅野蕭々、慶大教授になり、麻布に住む		

代表するものとなった。

後述するように、大正 5 年には安倍能成も妻恭子の病後療養のため、高瀬邸の離れ C に滞在していたから、次郎は和辻と安倍の両方に行き来していて、三人の交友関係は親密の度を加えていた。この年だけで次郎の「鵠沼行」は延べ 25 日、翌大正 6 年は 17 日に及んだ（注 8）。以下『阿部次郎全集』14 巻の「日記」から引用する。

「午前雨中を和辻と共に海に行く、海上の鈍い光と水辺の芥の落付いた青の美しさに驚く。三時過小宮も来り例の会あり、森田欠席。能成酔ふ。（略）雨中を小宮と九時半の汽車にて帰京」（大正 5 年 5 月 20 日）。

「朝出発鵠沼行、十一時過和辻方着、浴衣に着かへてねころんで三人で話す。午後てるさんへ来客、四時より安倍方食事、九時半の汽車にて小宮と帰途につく、月明かなり、十二時過ねる」（同年 8 月 14 日）。

「（略）品川より乗車鵠沼へ行く、安倍のうちの会也、小宮森田和辻皆来る。主として夏目先生の話、九時過森田小宮帰る。今夜は和辻にとまり、十二時まで三人にて話す」（大正 6 年 1 月 22 日）。

「天気よし、朝九時出かけて鵠沼行、和辻のところにて会。森田欠席。（略）雑誌の名を『思潮』とし、同人を拵えることにす。（略）夜とまる、照さんと三人にて一時過まで起きてゐる」（同年 4 月 21 日）。

「例の会」というのは、初め阿部次郎、安倍能成、小宮豊隆、森田草平の 4 人が持ち回りで月 1 回牛鍋をつついて議論していた会で、その後、和辻も加わったものらしい（注 9）。鵠沼の和辻や安倍のところで開かれた「会」では、そのころ岩波書店が出そうとしていた哲学雑誌のことが主に議論された。この 4 月 21 日の会で、雑誌の名を『思潮』とすることが決まったことが分かる。「日記」には岩波茂雄がきた日の記述がある。

「午後鵠沼に和辻夫婦を訪ふ。鎌倉に下車して七里浜を通つて鵠沼着。（略）三人にて十二時頃まで話す」（大正 6 年 7 月 1 日）。

「午前安倍を訪ふ、岩波も来る、午後六時の汽車にて帰京」（同年 7 月 2 日）。

4. 『思潮』創刊と岩波グループ

岩波茂雄（1881—1946）は明治 14 年、信州諏訪で生まれたが、志を立てて上京し、杉浦重剛の日本中学に編入を許された。明治 33 年一高を受験したが失敗し、翌 34 年再度受験して合格した。1 年生のときは東寮 15 番、2 年生のときは西寮 6

岩波茂雄の一高人脈（入学時の年次別）

明治33年	明治34年	明治35年	明治36年
伊藤 伸（英法） （大類）	阿部 次郎（英法）	安倍 能成（英法）	市河 三喜（英法）
鳩山 一郎（英法）	石原 謙（英法）	窪田 忠彦（理）	宇井 伯壽（英法）
森田 米松（文） （草平）	岩波 茂雄（英法）	小宮 豊隆（独法）	魚住 影雄（英法）
	上野 直昭（英法）	十河 信二（英法）	亀井 高孝（英法）
	荻原 藤吉（英法） （井泉水）	茅野 儀太郎（独法） （蕭々）	高橋 穰（英法）
	郷古 潔（英法）	寺澤 寛一（理）	鶴見 祐輔（英法）
	田邊 元（理）	中 勘助（英法）	宮本 和吉（英法）
	鳩山 秀夫（英法）	野上 豊一郎（英法）	
	橋田 邦彦（医）	原田 淑人（英法）	
	穂積 重遠（英法）	前田 多門（独法）	
		守谷 茂吉（医） （賢藤）	

注）明治33年には1年生に文科があった。

番に入った。2年のときは阿部次郎、荻原藤吉（のちの俳人井泉水^{せいせんすい}）らと同室だったという。

明治36年5月、一高生藤村操が「悠々たる哉天壤、遼々たる哉古今」にはじまる「巖頭の感」を残して日光華嚴の滝に投身自殺し、岩波茂雄は大きな衝撃を受けた。青年期の純粋な煩悶から悩みぬき、ほとんど学業を放棄したため、落第して安倍能成と同級になった。寮の喧騒を避けて田端に下宿したが、秋から翌年もほとんど通学せず、また同一学年を落第したため除籍になってしまった。

退学によって帝国大学本科生になる道を断たれた茂雄は、明治38年9月選科生として帝大哲学科に進み、3年後に哲学選科を修了した（注10）。いわばエリートコースを外れた形になったわけだが、岩波茂雄にとって一高で変則的ながら3年間を学んだことは、何にも代えがたい大きな財産になった。後年、彼が古書店から「岩波書店」の看板を掲げて出版事業に乗り出したとき、その企画、執筆、編集、経営に、一高同窓生の人脈は大きな力を発揮した。

岩波書店の最初の発売は大正3年9月、夏目漱石の『こころ』の出版許可を得たことであった。つづいて大正5年暮れに漱石が亡くなると、小宮豊隆らの全面的な協力のもとに、書簡集までも含めた「漱石全集」（全14冊）を企画、大成功を収めた。それまで、このような形の完全な個人全集はなかった。

漱石全集と並んで岩波書店の財政基盤を確立したのが、大正4年10月から刊行が始まった「哲学叢書」（全12冊）だった。哲学の一般的知識の普及を目的とするこの叢書は、折からの時流にも乗り、青年学生層から大歓迎をうけた。

哲学叢書の編集者は、岩波茂雄の一高以来の親友だった阿部次郎、上野直昭、安倍能成で、執筆者もほとんどが岩波と交友関係にあった新進の学者、研究者だ

った。安倍の『岩波茂雄伝』（岩波書店、昭和32年12月）によると「多くは西洋の著書によつての解説や講述であるが、哲学に対する時代の要求を充たすには役立つ」（p.142）という。

この叢書の内訳は、大正4年10月の^{きひらまさよし}紀平正美の「認識論」を始めに、^{はじめ}田邊元の「最近の自然科学」、宮本和吉の「哲学概論」、安倍能成の「西洋古代中世哲学史」、^{あきら}速水滉の「論理学」、石原謙の「宗教哲学」、阿部次郎の「倫理学の根本問題」、上野直昭の「精神科学の根本問題」、阿部次郎の「美学」、安倍能成の「西洋近世哲学史」、^{ゆたか}高橋穰の「心理学」、そして高橋里美の「現代の哲学」をもって、大正6年8月に全12冊、満2年間にわたる刊行が終わった。

岩波は700部から1000部出てくれればといっていたが、全巻予約の直接申込者だけで800人もいた。一番売れ行きがよかったのは速水滉「論理学」で、大正末までに7万5000部、それから昭和16年までに9万、岩波の生存中だけで18万部にも及んだ（『岩波茂雄伝』p.142）。

新しい哲学雑誌『思潮』は、この成功のうゑに読者層の拡大をねらったもので、主幹は阿部次郎、編集同人に安倍能成、和辻哲郎、小宮豊隆、石原謙らが加わった。岩波書店としては初めての雑誌発行だった。

「哲学叢書」はその企画がいつごろから始まったのか分らないが、雑誌『思潮』発行のほうは大正5、6年、^{たけし}鶴沼の松林のなかで進められた。前述したように和辻と安倍の離れBとCの間を、阿部次郎が行き来して案が具体化していった。

この雑誌の呼び物は、和辻哲郎の「古寺巡礼」とケーベル博士の随筆だった。安倍能成はケーベルが果たして書いてくれるだろうかと危ぶんだが、ケーベルは喜んで引き受け、帝大退職後も楽しんでこれを書いた。それは「日本の教養ある人々を喜ばせたばかりでなく、博士の日本に残した印象を更に確かにし濃くした」（『岩波茂雄伝』p.147）と安倍能成は書いている。

和辻の「古寺巡礼」は『思潮』の大正7年8月号から12月号まで、5回連載された。鶴沼から東京に引っ越すことが決まると、かねてから考えていた奈良への旅を実行に移したのだった。日本の古い仏像や建築を、西洋美学を学んだ目で見つめ直したこのエッセーは、その若々しい筆致で青年層から歓迎された。

この連載は翌大正8年5月、大幅に加筆されて岩波書店から単行本として出版され、すぐに多くの版を重ねた。第2次大戦に際して、生還を期しがたい青年たちは『古寺巡礼』を携えて奈良をめぐり、この日本の文化を護るために銃をとるのだと自分を納得させて、戦地へ赴いたという。

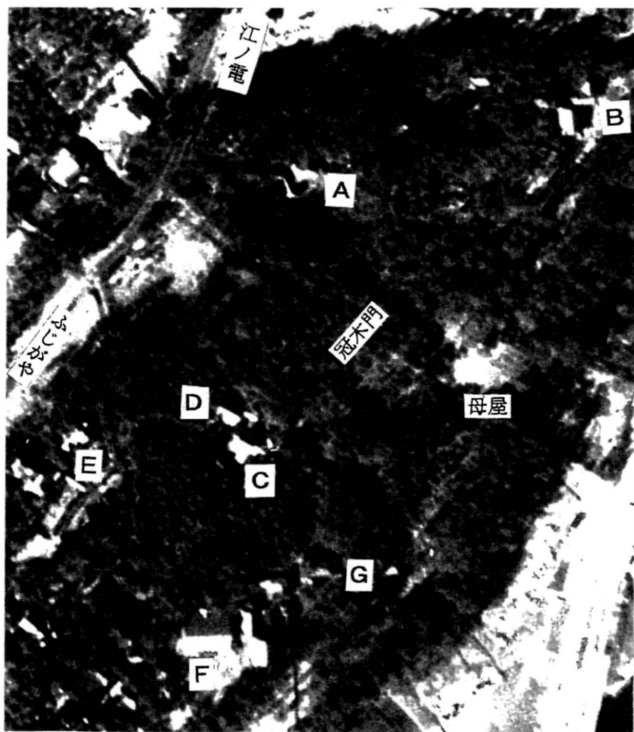
『思潮』は岩波が思ったほど部数が伸びず、半年ほど善後策を模索した結果、大正8年1月号で休刊になってしまった。わずか2年足らずの命だった。しかし、その2年半後の同10年秋、こんどは同じ岩波書店から和辻哲郎を主宰とする雑誌『思想』が発行される。これは『思潮』の後継誌ともみられるが、阿部次郎は自分の日記のなかで、ほとんど言及していない。なにか岩波と行き違いがあったようである。この雑誌にも鵜沼は関わりをもつのだが、これは後述する。

5. 安倍能成と中勘助

昭和20年(1945)の敗戦時、一高校長として難局を処理した安倍能成(1885-1966)は阿部次郎の1年後輩として明治35年、松山中学から一高英法・文科に入学した。同級生には藤村操、中勘助(1885-1965)らがいた。2年生になったとき岩波茂雄と荻原藤吉(井泉水)が落第してきて同級生になった。明治37年7月の学期試験では、安倍能成ら14人が落第して3年生に進級できなかった。岩波茂雄が2度落第して退学になったときである。

明治39年9月、東京帝国大学文科大学哲学科に、一高から宮本和吉、魚住影雄ら6人とともに入学した。大学ではケーベル博士に親しんだ。42年夏に帝大卒業、大正2年12月藤村操の妹恭子と結婚、3年6月に長男^{まこと}亮が誕生した。4年3月に恭子は法定伝染病である猩紅熱を患い、和辻の勧めもあつて退院後、一家は高瀬邸の離れを借りて静養することになる。これが『鵜沼』87号で書いた離れCとDで、能成はCを住居、Dを書斎として使った。大正5年夏、中勘助がひと夏をDで過ごしたこともすでに述べた。

右の航空写真は「鵜沼」87号に載せた一部分だが、安倍能成の『我が生ひ立ち』を読んでいるうちに、気になる点がでてきた。結論を先に言ってしまうと、離れCはともかく書斎Dの位置が問題になってきたのである。



能成の『我が生ひ立ち』では次のように書かれている。

「高瀬氏の家は、鵠沼の砂浜に近い藤ヶ谷といふ江の島電鉄の駅にあり、その門は大寺のやうに大きかつたが、この大門の側にある二間と、今一つ離れた砂山にある二間の離れが私達の借りた家であつた。私は離れの方を、まあ書斎に使つて居たが、大正五年の四月から、前にもかいた如く、慶応義塾大学予科のドイツ語の教師に採用せられたので、一週間中恐らく三日は、塾と同じ町の三田四国町の、友人亀井高孝の二階においてもらふことにした」(p. 510)。

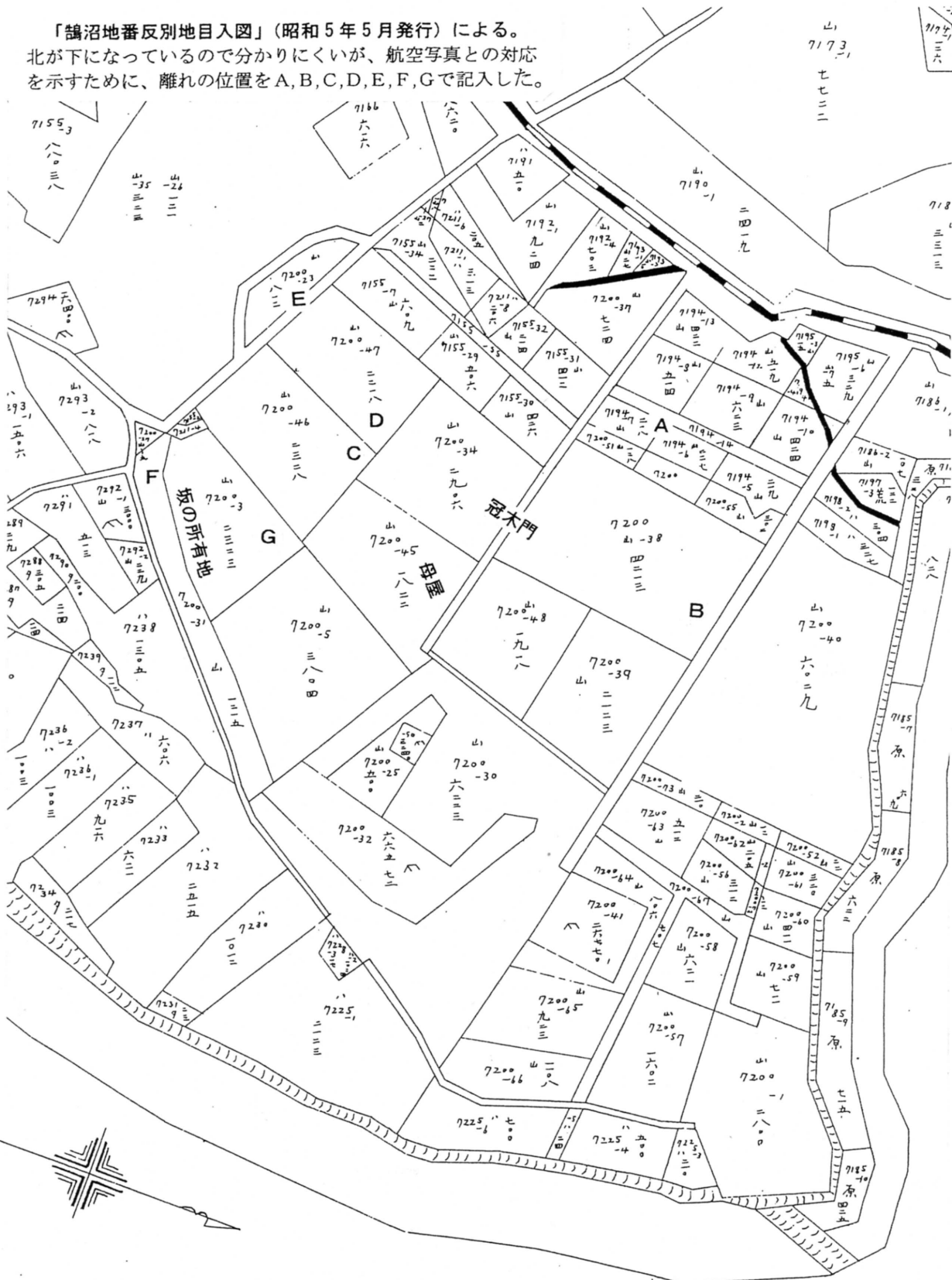
高瀬笑子さんの『鵠沼断想』によると「中藤ヶ谷の邸には西南の小高い丘の松林の中に恰好な離れ家があつて、この若い碩学たちは誰にも邪魔されずに寝泊まりして研究にうちこむことが出来た」(p.89)という。この「碩学たち」が和辻哲郎であり、阿部次郎であり、安倍能成であつて、離れがCを指していることはいうまでもない。それは邸の「西南の小高い丘」に建っていた。そして書斎Dは「今一つ離れた砂山」にあつたのである。

また中勘助も「広い松林の中で、ひとつ屋敷うちとしてはかなり離れてる閑静な二棟の一つ、書斎になつてゐるはうを借り、食事と茶だけを住居のはうで一緒にすることにしてみた」(『中勘助全集』11巻「亮ちやんの思ひ出」)と書いている。食事を一緒にとった住居がC、書斎がDだとすると「かなり離れてる」という記述には、どこか不自然さが残ることも『鵠沼』87号で指摘しておいた。この「かなり離れてる」は、能成がいうように、やはりCとDが離れていたことを示していると思われる。では離れた書斎Dは一体どこにあつたのだろうか。

中勘助が能成の上京中、亮にかこつけて恭子と親しくしていたことは、能成にとっては気になることだった。「夫の不在中、あだし男と散歩することが、家の少ない近郊のうはさに上り、批難を受けたばかりでなく、私自身もこれを不謹慎な行動と認めて、実は少し嫉妬もし、これを両人の親友である小宮に洩らしもした」と、のちにエッセイのなかで書いている。間もなく勘助は離れを出て、鵠沼海岸の借家に移った。

能成もまた離れCから邸内を転居する。「次男浩二の生まれたのは、大正六年の三月であつたが、生まれたのはまだ松林の中の離れであつた。高瀬さんの邸の構内の広い砂丘の西の麓に、新しい家が建てられ、そこに和辻君の細君の妹の千代子さんの夫の坂順三君が住んで居て、そこには道子さんと三保子さんといふ二人の娘があつたが、坂さんが東京に家を持つて鵠沼を去つた後、私達は一年足らず坂さんの居た家に住んで居た」(『我が生ひ立ち』 p.519)。

「鶴沼地番反別地目入図」(昭和5年5月発行)による。
 北が下になっているので分かりにくい、航空写真との対応
 を示すために、離れの位置をA,B,C,D,E,F,Gで記入した。



坂 順三は彌一より1年早く、神中（6回生）から御園兼三郎とともに一高英法科・文科に入学した。帝大は法科大学に進み、卒業後は三井物産に勤めた。高瀬笑子さんの「鵠沼拾遺」(『鵠沼断想』p.88)では、高瀬彌一（7回生）と神中で同級生と記されている。彌一は中学時代に休学しているのだろうか。

有田裕一会員が入手した「旧土地台帳謄本」によると、大正元年10月15日に「中藤ヶ谷 7200-3 高瀬照名義の山林、2.323 反、高瀬千代に所有移譲」とある。同10月31日には千代は坂順三と結婚しているから、坂が建てた「新しい家」はこの千代の土地に建てられた可能性がある。この土地は三越倶楽部（注11）があった辺りに該当する。航空写真をみるとFの近くにも小さな離れ（Gとする）がみられるが、これを「砂丘の西の麓」の離れとみるには、方位的に無理がある。西という記述を正しいとすると、該当するのは、むしろEでなければならない。中勘助がいた書斎はDでなくEではないだろうか。Gは今後の検討課題とする。

6. 茅野雅子・与謝野晶子・津田梅子

能成が鵠沼に住んで間もない大正5年夏、その離れを茅野雅子（1880-1946）が訪れた。『我が生ひ立ち』によると、

「なほ鵠沼滞在中にあつた一つの出来事は、夜陰に大きな門の傍に人音がして、茅野蕭々夫人雅子さんが尋ねて来られ、三高の先生達の生活が安逸に流れてアンビシャスな気持ちを失ふのを恐れて、茅野を東京に呼び寄せてくれといはれた

高瀬家をめぐる人々（2）		1920年（大9）	1921年（大10）	1922年（大11）	1923年（大12）
	高瀬 彌一 (1887-1954)	9.9 藤ヶ谷から川袋への 転居届	? この年高瀬家、川袋に 新築か	6.1 彌一、藤沢町会議員	9.1 関東大震災、川袋の 自宅倒壊
	和辻 哲郎 (1889-1960)	5.1 東洋大学教授 11.10 『日本古代文化』	6.9 長男夏彦生まれる 7.21 茅野宅で例の会 10.1 『思想』主宰		4.1 法政大学教授 慶大・女子英学塾講師
	阿部 次郎 (1883-1959)	4. - 日大文芸部講師	7.21-22 茅野宅で例の会、 茅野宅に泊	5. - 渡欧、例の会は休会	9.2 パリで関東大震災の報 を聞く
	安倍 能成 (1883-1966)	4. - 法政大学教授 慶大・女子英学塾講師			
	中 勘助 (1885-1965)	2. - 手賀沼畔に寓居	7.21 茅野宅の例の会に出 席、和辻・阿部に会う	2. - 『銀の匙』（岩波書店）	11. - 手賀沼を去り東京へ
	茅野 雅子 (1880-1946)	12.26 長女晴子全快祝い	7.21 鵠沼の自宅で例の会		8.1 長女晴子亡くなる
	林 達夫 (1896-1984)		? 高瀬邸の離れ(?)に 滞在	5.27 高瀬芳と結婚、4軒別 荘に住む 7. - 京大哲学科選科修了	9.1 4軒別荘倒壊、川袋の 高瀬邸の離れに身を 寄せる

ことであった。翌年の四月に恰も、慶応義塾大学医学部が創立されることがきまっていたので、早速予科主任の田中萃一郎氏に茅野を推薦しておいたが、いよいよ四月に茅野がやつて来て（略）」（p. 516）。

「夜陰」では、高瀬邸の冠木門も閉じていたことだろう。「大きな門の傍に人音がして」というから、これを聞いたのは門に近い離れCと思われる。

茅野蕭々（本名儀太郎、1883－1946）は明治 35 年、諏訪中学から一高独法文科に入学、小宮豊隆と同級になった。安倍能成、中勘助、野上豊一郎らは同年の英法科・文科である。明治 38 年 9 月、東京帝国大学独逸文学科に入学、同 40 年 7 月には『明星』で知り合った増田雅子と結婚した。雅子は与謝野晶子、山川登美子とともに『明星』の才媛として注目されていた。

明治 41 年 7 月、帝国大学独逸文学科を卒業すると同時に、雅子と一緒に生後間もない長女晴子を連れて、第三高等学校独逸語講師として京都に赴いた。雅子が能成を鶴沼に訪れたのは、京都での「安逸な生活」が 8 年にもなろうとしているときだった。

能成の推薦で大正 6 年 4 月、蕭々は慶応大学に職を得て上京、麻布本村町に住んだ。そして早くも 7 月の「例の会」にはメンバーとして迎えられ、9 月 21 日に茅野宅で「例の会」が開かれている。阿部次郎「日記」によると翌 7 年には 5 月 15 日、11 月 14 日の 2 回茅野宅で開かれている。月 1 回、6 人の持ち回りということだから、これが大正 7 年に茅野宅で開かれた会のすべてであろう（注 12）。

大正 9 年 12 月 26 日には「正午和辻により二時より茅野の晴子ちゃん全快祝に列す。子供十六人」の記事がある。晴子はこのころ肺結核を病んでいた様子である。青木生^{なか}子『茅野雅子』（明治書院、昭和 43 年）によると「晴子は上京以来、ほとんど毎年のように重患に襲われ、その間生死の境を往来したことも一再ではなかった」（p.136）という。

半年後の阿部「日記」には、久しぶりに「鶴沼行」の文字がある。

「午前女子大学講義第三節を書き終ふ、午後四時半の汽車で鶴沼行。茅野の宅にて例の会あり、和辻中と一緒にいる、九時半和辻中を送って月光の裡に茅野夫婦と散歩し一泊す」（大正 10 年 7 月 21 日）。

翌日は「朝雨がふつたり晴れたり、昔馴染の場所を散歩、五時の汽車にて帰京す」と夕方まで滞在した。「昔馴染の場所」とあるから、この鶴沼の茅野宅の「例の会」は、高瀬邸のなかの離れで開かれたとみるのが自然であろう。この離れは笑子さんによると、和辻や阿部が論文を書いた最初の離れCのようなものである。

「この同じ家（和辻や阿部がいた離れ＝筆者注）には、祖父が亡くなり、私の生まれたあとで、茅野蕭々、雅子夫妻がしばらく住んでいた。ドイツ文学者や、『明星』の歌人たちが訪ねてきて、その中に大柄で目立つ与謝野晶子を見たことがあるように記憶する」（『鵠沼断想』p.89）。

『鵠沼』87号で引用したように、雅子の『朝の果実』（昭和13年、岩波書店）によると、晴子の療養のため次女多緒子を連れて鵠沼の借家でひと冬（あるいは二た冬？）を送ったことがあった。それが「例の会」があったこのときと重なるのかも知れない。大正10年といえば、高瀬家は川袋に土地を求めて、家屋を建て、移住していると思われたので、87号では雅子の鵠沼滞在を大正7—9年の間としたが、阿部「日記」によって大正10年（11年も？）と訂正しておく。

雅子がいたのは高瀬邸ではなく、別の借家だったという説もあるが「大きな幾万坪かある屋敷の中に、ぽつん、ぽつんと建てられた小さな借家の一つ」が高瀬邸以外にあったとは考えにくい。高瀬家は藤ヶ谷から川袋に一度に転居したのではなく、少なくとも大正10年夏ごろまでは、土地は銀座の「徳力」（鈴木喜兵衛）に売却したものの、家屋のいくつかはまだ所有していたのではないだろうか。

晴子は両親の必死の看護の甲斐なく、2年後の大正12年8月1日、東京麻布の茅野宅で亡くなった。数え年16歳であった。

与謝野晶子や『明星』の歌人の来訪については確認できなかったが、笑子さんが津田英学塾に入って聞いた次の話によって、津田梅子が来ていることは間違いない。おそらく祖父の高瀬三郎を訪ねてきたのであろう。

「津田塾に入った時、ミス・アンナ・ハッホンが、津田梅子と鵠沼の家に行ったことがある、と言われた。ハッホンは津田梅子と津田英学塾を創設し、終生津田に奉仕した人である。極めて質素な暮らしをして、四十年間給料を受け取らず、戦争の直前に帰国した」（『鵠沼断想』p.90）。

「戦後、私は津田に再入学して卒業したが、卒業式のあと塾長宅に招かれて行ってみると山川菊枝が来ていた。山川女史は、「あなたの叔母さまが津田にいた時は、津田一の金持の学生だったが、あなたは津田一の貧しい学生で大へんでしたね。でもよくやりました」とほめてくれた。高瀬照が青山菊枝と津田の同級生であった」（p.92）。

笑子さんは高瀬家が生活不如意の戦時中、勤めに出ておられたが、戦後苦学して津田に再入学、さらに東京大学に進み、東大女子学生の1期生となった。

7. 第二次『思想』と林達夫

阿部次郎主宰の『思潮』が廃刊になって2年半後の大正10年(1921)10月、同じ岩波書店から和辻哲郎を編集者とする『思想』が発行された。こんどは岩波も編集に加わった。『思潮』で好評だったケーベル博士のエッセイも毎号掲載された。岩波は「ケーベル先生の文章を掲載するだけでも『思想』を発行する意義がある」というていた。ケーベルは関東大震災の直前、帰国の途につき横浜のロシア領事館で亡くなった。『思想』は8月号で「ケーベル先生追悼号」を出した。

昭和2年4月、三木清(1897-1945)が三高の教職を辞し、法政大学教授となって上京、岩波書店にも定期的に来て編集に協力することになった。この年7月に「岩波文庫」31冊が創刊され、教養主義古典の指針となった。有名な「真理は萬人によって求められることを自ら欲し、藝術は萬人によって愛されることを自ら望む」という発刊の辞は、三木の文に岩波が手を入れた。

三木は大正3年9月、一高英法科・文科に入学、和辻の8年後輩である。大学は京都帝国大学に進んで哲学科を卒業した。三木は西田幾多郎にもその学才を認められていたのだが、「その才気の奔放と欠点の多い性格とのため敵を設け」(安倍能成『岩波茂雄伝』p.167)、志を京都大学に得ず、上京して岩波のブレーンとして著書の計画、著者の選定、さらには宣伝文の筆者としても協力した。

昭和3年2月、岩波講座「世界思潮」(全12巻)の刊行が始まった。編集には三木清、羽仁五郎、林達夫が名を連ねた。読者の関心も大正教養主義から社会科学的なマルクス主義へと変化していた。というよりマルクス主義こそ「新しい教養」ともみなされたのである(竹内洋『教養主義の没落』中公新書、p.55)。

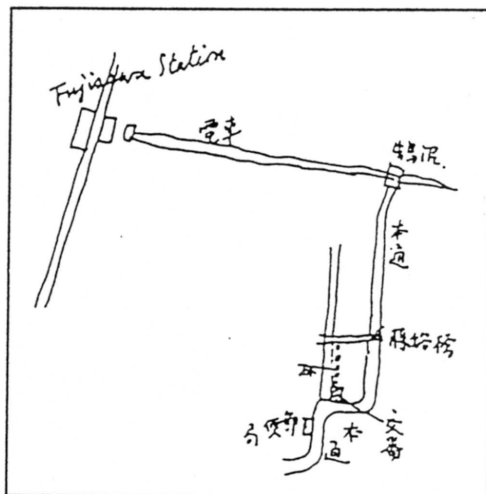
『思想』は昭和3年9月号まで7年間に82冊を発行したが、返品が多くなり、同号で休刊に入った。

『思想』(第2次)が復刊したのは、半年後の昭和4年4月であった。編集者は和辻哲郎、谷川徹三、林達夫の3人だった。達夫の手になると思われる「『思想』再刊の辞」には、次のような期待が述べられている(注13)。

「如何にそれが現代の特徴であるからとは言へ、かの猥雑と卑浅とをわれわれは斥ける。またかの一党一派に固着し、他の立場を無視し排擠するの偏狭と固陋とを厳に警める。いやしくも真理の究明を目差すものなる限りわれわれはあらゆる立場を容れ、その生き生きした対立と共同のうちに、常により普遍的なるものへの到達を志すであらう。普遍人間性に対する信頼からわれわれはこのことを期待する」。

林達夫（1896－1984）もまた、大正 5 年に一高独法文科に入り、文芸部委員として健筆をふるった。2 年上には三木清、1 年上には谷川徹三がいた。3 年生のとき父との衝突から 1 年休学してアメリカ行を考える。高瀬邸で彌一の 5 番目の妹の芳を知ったのはこのころである。

一高中退という形で京都帝大哲学科の選科へ進み、深田康算^{やすかず}のもとで美術史を専攻した。大正 11 年 5 月、高瀬芳と結婚して鵜沼の「4 軒別荘」（北から 3 軒目＝



右図参照＝注 14) に住んだ。ここで関東大震災に遭遇した。
このあと一時、川袋の高瀬邸の離れに移り住んだが、昭和 13 年、鵜沼上岡 6098（現鵜沼桜が岡 2-1-26）に古い農家を移築して英国風の家を建てた。昭和 59 年に亡くなるまで林は鵜沼を愛し、この家に 46 年間住み続けた。（この英国風の家については『鵜沼』83 号の「林達夫の住んだ家」、および芥川比呂志「鵜沼の林さん」を参照のこと）。

ここで高瀬彌一の他の妹、3 番目の喜美^{きみ}と 4 番目の松^{まつ}についても触れておく。彌一には五人も妹がいたから「女の子たちが自然に相手を見つけ出せるような環境を、祖父母も父も考えていたと思う」と『鵜沼断想』には書いてある。

照の『和辻哲郎とともに』のなかには、喜美について次のような記述がある。

「ところでこの三女と言うのは、高等女学校を出ると直ぐ、満十七歳になったばかりで懇望され、いやいや嫁に行き、新婚旅行の帰り道から逃げて来てしまった不幸なものだった。相手は東大を銀時計で出た真面目一方の理学士で、小さい時から私の父が可愛がって面倒を見て来た人だったが、派手な気性の妹には合わなかった。是非にとその妹を望んで父に頼んだ先方の眼も間違っていた」（p. 149）。

この喜美の「相手」というのは、明治 35 年一高理科に入学した窪田忠彦（1885－1952）で、安倍能成と同学年であるが、個人的な親交はなかったようである。のちに東北帝大教授となり、世界的な幾何学者として知られるようになる。岩波書店からだけで『初等微分幾何学（岩波全書）』（昭和 9 年）、『微分幾何学（高等数学叢書）』（同 15 年）、『幾何学の基礎（岩波全書）』（同 16 年）、『近世幾何学』

(同 24 年)、『平面解析幾何学』(同)、『微分幾何学 (岩波全書)』(同 32 年) など 6 点の著書が出ている。

笑子さんの『鵠沼断想』によると「藤ヶ谷の家の離れには父の友人たちが次々に来て住んだ。阿部次郎、和辻哲郎につづいて茅野蕭々、雅子。茅野さんのところには与謝野晶子が時々来ていた。それより少し遅れて藤ヶ谷の家によく訪ねて来たのは、少壮学者の矢代幸雄や林達夫など」(p. 7) と書かれている。

この矢代と結婚したのが四女の松である。矢代と松は大正 6 年 9 月 14 日に結婚しているから (注 15)、笑子さんの記憶している藤ヶ谷に矢代がよく訪ねてきたというのは結婚後のことであろう。しかし茅野雅子が住んだときより遅れてというのは時代が合わない。この「少し遅れて」は林達夫にかかるのかも知れない。

矢代幸雄 (1890-1975) も彌一の 1 年後、同じ神中 (8 回生) から一高英法科・文科に入った。在学中から阿部次郎、安倍能成、中勘助らと親しく、それは終生変わらなかった。帝大英文科を卒業後、東京美術学校教授、ハーバード大学講師などを勤め、美術評論家として活躍した。岩波書店から『西洋美術史講話古代編』(大正 10 年)、『日本美術の特質』(昭和 18 年) が出ている。

『鵠沼断想』には、二人の出会いを次のように書いている。

「矢代は横浜の原三溪の、古美術蒐集を援け、また当時の芸術家や文人たちの美術鑑賞の会などをしていた。インドのタゴールが来た時は、原邸に泊めて世話し、古美術の案内通訳を一手にひきうけていた少壮学者であった。原家と親しい関係にあった和辻夫婦が、音楽や美術に特別秀でている松子を引きあわせたのである」(p. 91)。

五女の松叔母のことは『鵠沼断想』p. 7 にも出ているが、ここでは『ゆく河の流れ』p. 21 から同様の記載を引いておこう。

「私の一番古い記憶は、四歳位の時と思うが、若い叔母とよく散歩したこと。その頃、元東大教授のドイツ人、テオドル・ステルンベルヒ (原文のまま) が鵠沼海岸に住んでいて、高瀬の家にも見え、叔母たちとも親しくなっていた。殊にピアノの上手な松子叔母がお気に入りだったそうであり、叔母も私を連れてステルンベルヒの家に遊びに行った」。

笑子さんによると、シュテルンベルクと一緒に田中耕太郎、星島二郎 (のちに法相) も高瀬邸に訪れたことがあるという。この二人は帝大法科在学中、シュテルンベルクの家に書生兼通訳として住み込んでいた。

8. 野呂栄太郎の『日本資本主義発達史』

最後に高瀬邸とは直接関係ないが、林達夫との関連で野呂栄太郎を取り上げておきたい。これまで顔を出した人はほとんどが一高、東京帝大の出身者だったが、野呂は慶応義塾大学理財科（いまの経済学部）の卒業である。はじめて鵜沼にきたのは大正9年12月で、まだ慶応の学生だった。「冬を暖かいところで過ごしたいと、保養がてら勉強に来たのが親しくなるきっかけでした。当時私は六才でした」と後年、野呂を親身になって世話した島田いしの長女愛子は『鵜沼時代の野呂栄太郎』（同刊行委員会編、昭和60年、p.8）で回想している。

大正15年4月に「京都学連事件」で検挙され、8月に病気で保釈、秋から翌年の昭和2年春にかけて、七里ヶ浜の鈴木病院の隣の結核専門の下宿である太田屋（湘浜館）で静養した。「色々な点で困る事が多いから是非来てくれという手紙が来ましたので母と二人で迎えに行き、隣の一人で隠居している森のおじさんの処（現在の「天金」）に紹介してあげました。食事の世話は私の家でしました。私の十二才の時のことです」と愛子は書いている（島田愛子『鵜沼時代の野呂栄太郎』所収 p.9）。野呂は幼いころ結核性の関節炎で右足首を切断、義足だった。

この鵜沼の寓居、森新五郎宅と島田いし宅（下図参照＝注16）で、野呂は昭和2年春から8年春までの6年間を病魔と闘いながら、超人的ともいえる執筆活動



を続ける。林達夫は『思想』の思い出」と題して次のように書いている。

「この再刊号には、和辻哲郎、谷川徹三、わたくしが名をつらねている。——再刊号以来しばしば『思想』に名をあらわす珍しい執筆者の一人に野呂栄太郎がある。この人については、わたくしには特に忘れられぬ思い出がある。当時、この慶応大学を出て間もない無名の若いマルクス主義者の才能を高く買ってその身辺のことまで気をつかっていたのは、立場の違うその教師の一人小泉信三氏であった。氏が岩波茂雄に野呂のことを依頼されたのがきっかけになって、『思想』との交渉が、引いてはわたくしとの交渉も

はじまったのである。彼が肺患のため療養していた場所が、偶然、わたくしの住む鵠沼であったことも、必要以上に彼我を往き来させる基因になったが、しかし編集者と執筆者との交渉から個人的交わりを結ぶということのたえてなかったわたくしが自ら進んで異例の附合いをしたというのは、やはり彼の人柄に大きな魅力があったからにちがいない。わたくしは彼にそれまで見たことのない清潔な思想の使徒を見出したのである」(林達夫『鵠沼時代の野呂栄太郎』所収 p. 84)。

長々と引用したのは、鵠沼に住んだ野呂と林という、二人の優れた思想家の美しい魂の交錯を記録しておきたかったからである。

大正 14 年、第 50 回帝国議会で「治安維持法」が制定され、左翼勢力に対する弾圧は日ごとに激しさを加えていった。野呂は合法、非合法を巧みに使い分け、党活動が続けていたが、昭和 3 年 3 月 15 日の一斉検挙(3・15 事件)は逃れたものの、翌年 4 月 16 日の一斉検挙(4・16 事件)で豊多摩刑務所に収監され、過酷な拷問、迫害をうけた。

1 か月後釈放されたが、5 月下旬、小田急で鵠沼海岸駅に着いたときは、衰弱が激しく、駅の外の砂の上で休ませ、戸板で島田いし宅まで運ばなければならなかった。当時、小田急江の島線は開通したばかりで、駅舎もまだ出来ていなかった。「大変な咯血だったので、そのあと絶対安静の状態を二ヶ月ばかり続けて寝たきりでいたため、高熱と汗で、寝ていたところの畳が、二枚、ぬけてしまった程でした」(島田愛子『鵠沼時代の野呂栄太郎』所収 p. 11) という。

これより前、昭和 4 年 4 月に『思想』(第 2 次)が再刊されたことは既述したが、この再刊号に野呂栄太郎は「猪俣津南雄氏著『現代日本ブルジョアジーの政治的地位』を評す」を載せた。そしてそれ以来、次の諸論考が『思想』に載った。

昭和 4 年 5 月号「日本に於ける土地所有關係に就いて」、

同年 9 月号「日本に於ける土地所有關係に就いて(続)」、

昭和 5 年 1 月号「日本資本主義現段階の諸矛盾」、

同年 7 月号「世界的恐慌拡大の過程における資本主義的合理化と無産階級」

これらの著述をもとに、野呂生前の唯一の著書となった『日本資本主義発達史』が昭和 5 年 2 月、鉄塔書院から出版され、野呂の名は不朽のものとなる。この本は戦後になって、昭和 24 年 6 月「岩波文庫」に入った。

鉄塔書院は岩波書店にいた小林勇が独立して始めた出版社だった。小林は『思想』の縁で知っていた林達夫を鵠沼に訪ね、紹介してほしいと話した。林は小泉

信三のほうがいいといい、それに従って小泉の紹介状をもらって再び鵜沼に戻り野呂を訪ねた。小林は次のように書いている。

「野呂は布団の上に半身を起して私を迎えてくれた。小泉の手紙を丁寧に開いて、真剣なまなざしで読んだ。私は野呂に今まで書いたものを集めて出版さしてほしいと話した。野呂は、はじめまだ本にする意志がないと言ったが、暫く話しているうちに、少しずつ動いてくることがわかった。私はいろいろ話をし、二時間くらい野呂の枕頭にいた。そして結局本は私のところから出版しようということになった。野呂は貧しい部屋に臥していた。が清潔で、凛々しい感じであった。少しもたかぶるところがなく、また冷たい感じもしなかった。(小林勇『鵜沼時代の野呂栄太郎』所収 p. 113)。

この著作がひとつの契機になって、野呂を中心に平野義太郎、山田盛太郎、大塚金之助らによる「日本資本主義発達史講座」(全7巻)の企画が岩波書店で進められるのである。『岩波書店五十年』年表によると、昭和7年5月20日刊行が開始されたが、治安維持法による言論弾圧下の困難な出版だった。同書はいう。

「この講座の中心は野呂栄太郎氏であった。編集者を中心に執筆者が約半年にわたって討論をした後執筆にかかったことは、この講座ではじめて行われた異例のことであった。はじめの3巻までは検閲を無事通過したがそれ以後はほとんど全部発売禁止処分にあい、その改訂版が漸く読者の手にわたるとい、はげしい干渉をうけた出版であった(1933. 8. 26 完結)」。

この講座の「趣意書」は野呂が書いた。その1節に「急迫せる情勢に転倒せる帝国主義者の脳裡には、恐らく戦争とファシズム以外の考えは浮び得ないであろう」と指摘し、「本講座は、今日世に問いうるかぎりにおいて、日本資本主義のもっとも包括的な科学研究であり、その本質的矛盾のもっとも根本的な分析である」と告げている(小林勇『鵜沼時代の野呂栄太郎』所収 p. 116)。

しかし、この講座に野呂が執筆することはなかった。昭和7年10月の共産党員一斉検挙のあと、中央委員として地下にもぐって党の再建にのりだした野呂は、翌年11月28日逮捕されて、言問署、上野署、品川署とたらい回しの拷問をうけ、昭和9年2月18日北品川病院に移され、翌19日に絶命したからである。

今年、平成16年6月12日に鵜沼公民館で「鵜沼時代の野呂栄太郎さん」と題した没後70周年を記念する集いが開かれた。この集会には、野呂とともに共産党中央委員会の再建に尽くし、戦後はベトナム反戦の旗を高く掲げた故逸見重雄氏の未亡人で、今年100歳を迎えられた逸見千鶴子さんはじめ、80人を超える参加

者があつた。没後 30 年、40 年、50 年と節目ごとに開かれてきた記念集会が、今回も鵠沼で開かれたことは、野呂がいまも多くの人から愛され、人々の共感を得ていることの証として、記録されるべきであろう。 (いとう さとし)

- (注 1) 明治時代の『一高寮生名簿』(103×156 mm)は明治 40-42 年の 3 冊が残っている。高瀬彌一が在学していたときと重なるが、彌一の名前は載っていない。明治 39 年は『向陵駒場』(昭和 47 年 1 月号)による。
- (注 2) 高瀬笑子さんの『鵠沼断想』p. 89 の「鵠沼拾遺」によると「父は一高から東大の法科に入り、英文科にしばらく籍をおき、国文科に移り卒業した」と記されている。
- (注 3) 「蓋平館別荘」は明治 38 年に建てられた。本館よりも立派だったので「別荘」と称したという。現在、その跡に旅館「太栄館」が建っていて、玄関右手に「蓋平館別荘跡」の標識がある。石川啄木も一時、ここに下宿していたことがある。
- (注 4) 有田裕一会員が入手の「旧土地台帳謄本」による。
- (注 5) 小山文雄『個性きらめく—藤沢近代の文士たち—』(p. 262) による。
- (注 6) 阿部次郎の日記に「仕事をもつて鵠沼へ行く」(大正 5 年 5 月 2 日)、また「学校。(略)九時前の汽車にて鵠沼へ帰る」(同 8 日)とあり、「明日帰京せむとす。仕事は未だ半ばに到らず。鵠沼にゐる間殆んど連夜熟睡し得ざりき」(同 19 日)とある。
- (注 7) 小山『個性きらめく』(p. 245) を参照。
- (注 8) 和辻および安倍宅の「例の会」を含む。
- (注 9) 小山『個性きらめく』(p. 261 および p. 270) を参照。
- (注 10) 帝国大学では、本科に欠員があつたとき選科を履修することができたが、本科とはいろいろな点で差別があり、3 年を終わっても「卒業」ではなく、選科「修了」とされた。
- (注 11) 和辻照『和辻哲郎とともに』に「電話を三越(店員保養所)から取り次いで来た」(p. 184)とあり、照が書いている大正 5 年当時はすでに三越倶楽部があつたことが分かる。
- (注 12) 大正 8 年以降、阿部次郎の日記には欠落した日が多く、「例の会」の記載が少ない。
- (注 13) 小山『個性きらめく』(p. 285) による。
- (注 14) 小山『個性きらめく』(p. 283) による。林が友人に宛てた書簡に添付したこの地図で、4 軒別荘の正しい位置が分った。
- (注 15) 阿部次郎の「日記」によると大正 6 年 9 月 14 日に「横浜のグランドホテルに矢代と松子さんの結婚式に行く。久しぶりに照さんや原一家の人とあふ」とある。
- (注 16) 平成 16 年 6 月の没後 70 年記念「鵠沼時代の野呂栄太郎さん」の見学マップによるが、逸見千鶴子さんの実家の位置を訂正した。

高瀬彌一先生

会員 青木 悠

高瀬彌一氏が教員をしていたことがあると聞き、遊行寺境内にある藤嶺学園高等学校に濱谷校長を訪ね、彼の勤務歴の調査を依頼した。同学園法人事務局の山田教諭が過去の書類を捜してくれたが、大正8年(1919年)と大正12年(1923年)の関東大震災の2回の火災で当時の関係書類は焼失してしまい現在は残存していないとのことであった。ただ濱谷校長から送られて来た昭和51年版及び昭和60年版の同窓会名簿の旧職員の中に高瀬彌一の名前があり、また昭和51年発行の創立60周年記念誌『藤嶺台』184ページの旧教員名簿には高瀬彌一の正式の名前で記載されていた。このことで彼が同校の教員であったことが裏付けられる。それ以外には記録がない。また当時の生徒には故人となれた河野一郎、今井達夫^{※1}の両氏等、既に100歳を超えており現存の可能性が薄いので彌一氏の三女八重子氏から戴いた手紙より推測することにした。

手紙によると、彼は明治20年(1889年)7月28日横浜で生まれ、当時神中と呼称された神奈川県立第一中学校(現県立希望が丘高等学校)卒業、第一高等学校(現東京大学教養学部)入学、東京帝国大学法学部に進み、その後、文学部英文科に転科、大正5年頃卒業、卒業時は国文科(卒論が国文)のようである。卒業後短期間教員をしていたとのことである。

財団法人私立藤嶺中学校(現藤嶺学園藤沢中学・高等学校)が開校したのが大正5年(1916年)であるから彼が大学卒業後同校に奉職したのは開校間もない頃ではないかと思われる。国語科の教員か英語科の教員かについては、判らない。大正8~12年には教職を退いていた。(2回目の火災が関東大震災であるので)もしもそれ以後も教職に就いていたら職員名簿に記載されているはずである。

八重子氏の母(大正6年に結婚)の話によると試験答案の採点では整然と書かれた答案は無条件でよい点を与えていたとのことであった。型破りの快活な教師のように伺える。その頃の卒業生に会えればプロフィールがうかがえるのだが。残念ながら調べることが出来なかった。

※1 藤沢市図書館編「わが住む里」第36号 44ページ 高瀬笑子著『鵠沼断想』

鵜沼人=高瀬弥一

渡部 瞭 (会員)



1. 実業家高瀬弥一の出発

《遊行寺》の通称で知られる時宗総本山とうたくさん藤澤山
無量光院清浄光寺は、藤沢市西富に市内最大の伽藍がらん
を展開する名刹である。その本堂の真裏に回って
みると、そこは「直檀」じきだんと呼ばれる本山直属の檀家の墓地になっている。

その直檀墓地の中でも図抜けて大きな間口4間、奥行き5間、面積20坪という敷地を有し、ピンク系御影石の巨大な墓石と2基の石灯籠が見られるのが高瀬家の墓である。棹石の正面には〈五三の桐〉の家紋と「高瀬家累代之墓」、右面には高瀬賢二と高瀬三郎・高瀬キク夫妻の墓誌、左面には高瀬弥一・高瀬つる夫妻の墓誌、裏面には「大正六年三月建之 施主 高瀬弥一」と彫られている。中台裏面には工事に携わった職人の名もある。高瀬賢二とは、今回この墓誌を見て初めて知った名であるが、「義畔速得芳賢童子」という戒名から、生まれて間もなく亡くなったと思われる。明治30年3月22日に死亡しているから、賢二という名前前から見ても、三女=喜美と四女=松誕生の間に生まれた三郎の二男であろう。

右脇には現在の施主である弥一の二男=逸男氏が建てた黒御影石の墓誌があり、二人の記名がある。一人は生まれて間もなく起きた関東大震災で圧死した弥一の二女=高瀬美枝子であり、もう一人は三郎の三女で弥一の妹=高瀬喜美である。

高瀬三郎が胃癌のため享年57歳を以て死去したのは、1916(大正5)年も押し詰まった12月20日のことであった。

父=高瀬三郎の死を期に、嫡男であった高瀬弥一は家督と事業を継ぐことになったと思われるが、事業の方、すなわち1904(明治37)年に横浜南仲通5丁目に三郎が創設した《高瀬合資会社》は、早々に処分してしまったのではなかろうか。

弥一は鵜沼から動かずにできる仕事を選んだと見られる。

父の死から1年を経ず、本郷の学生下宿の娘だった阿川つると結婚する。後に「コスモス夫人」と渾名される楚々とした美人であった。三女=八重子氏のお話では、その前に短期間結婚生活を送った女性があったのだという。子をなす前に

離婚したらしい。

1917(大正 6)年秋には長女=笑子が誕生し、家庭人としての責任が増した。

2. 川袋高瀬邸への移転

鵠沼の歴史をひもとくと、北西部のいわゆる「本村」は千年以上の歴史を有する半農半漁村であったのに対し、南東部は明治中期以降に別荘地開発が行われた。つまり百年余りの歴史しかもたない地域であることがわかる。そして両者の中間には江戸時代中期以降新田開発がなされたが、集落は北部に数軒見られたのみで、クロマツの生えた砂丘と単なる畑地・果樹園が分布する無人地帯が細長く展開していた。この無人地帯の中央に、後に小田急江ノ島線が敷設されることになるのだが、弥一が家督を継いだ大正初期にはそのうわさはまだ立っていなかったと思われる。まだまだ鵠沼の交通機関は、東の縁をかすめるように走る江ノ電と人力車の時代だった。

高瀬弥一が先ず手がけた事業は、《鵠沼御殿》の建つ約2万坪の土地を銀座の豪商《徳力》に売却し、その売り上げで上記無人地帯にほぼ同面積の土地を購入。江ノ電高砂停留所(現石上駅)にほど近い南向き斜面に5千坪の自宅用地を確保し、残りの土地を分譲するというものだった。

この一連の作業は1918(大正 7)年から1919年にかけてあわただしく行われたらしく、藤ヶ谷高瀬邸内に居住していた安倍能成、和辻哲郎・照夫妻、阿部次郎らも相前後して鵠沼から去った。また長男=弥太郎が誕生した。

高瀬家が川袋の新しい邸宅に転籍したのは1920(大正 9)年9月10日ということになっている。この純和風数寄屋造りの新邸については、次章で吉川八重子氏が詳述されているが、柱も細く、全体に華奢な造りだったという。

この年はまた、鵠沼海岸別荘地開発の大立者=伊東将行が7月に他界し、その功績を顕彰する『鵠沼海岸別荘地開発記念碑』が、賀来神社境内に建設された年でもある(別碑『建碑賛助者』の中に高瀬彌一の名もある)。このことは、鵠沼東部の宅地開発が新しい段階に転換した象徴的な出来事といえるのではなかろうか。すなわち伊東将行型から高瀬弥一型、あるいは別荘型から定住住宅地型、または人力車型から自動車型への転換とでもいおうか。

川袋の新邸に移った1920～21年にかけても、二男=高瀬逸男が誕生したり、妹=松が矢代幸雄と離婚し、兵藤憲二と再婚したり、身边はあわただしかった。

1922(大正11)年にはいと、末妹の芳が林 達夫と結婚、現在の鵠沼松が岡 3

丁目にあった四軒別荘(36ページの地図参照)に新居を構え、川袋高瀬邸は弥一の家族と母=キクという世帯になった(もちろん、数人の使用人は同居していたが)。おそらく弥一一家の最も安定していた時期と思われる。

そして、この年6月に行われた藤沢町会議員第4期改選で高瀬弥一は当選し、町会議員となった。名実共に鵠沼に土着した観がある。

前々章の17ページで伊藤 聖会員が紹介している大正13年の一高卒業生名簿における弥一の職業欄は、「地主」という実に素っ気ないものである。弥一は藤沢町会議員という立場をあまり重視していなかったように思われる。また、不動産売買にしても、個人的な立場で行われたらしく、法人設立の記録が見あたらない。

1922年秋から、弥一は自宅門前に通ずる2本の自動車道路建設に取りかかる。その一つは旧江之島道から江ノ電高砂(現石上)停留所脇を通り、高瀬家敷地の北辺に至る《高瀬通り》であり、もう一つは東海道本線藤沢駅南口と高瀬家正門を結ぶ《橘通り》である。この2本の道路は、高瀬家正門付近で丁字路となっていた。現在は旧高瀬邸中央を南下する道路と交差する十字路になっている。

高瀬通りを挟んで北側、「高砂」と呼ばれた小高い砂丘の麓一帯は《高瀬住宅地》という名の分譲地として売り出された。これまでの鵠沼東部における宅地開発は、別荘地として開発されたのだが、弥一の開発ははじめてから定住の住宅地を念頭に行われたと考えられる。従って1筆の面積もせいぜい数百坪で、京浜方面への通勤に便利なところ、すなわち藤沢駅へ出やすい場所が選ばれた。ここを購入した人々には海軍軍人が目立つ。

3. 関東大震災前後

1923(大正12)年、高瀬家では7月5日に二女的美枝子が誕生し、嬉しい夏になった。

9月1日は長女=笑子の誕生日だった。藤沢小学校1年生の笑子が2学期の始業式を終えて帰宅すると、台所にはケーキが焼け、赤飯が炊きあがっていた。そこへ相模湾沖を震源とするマグニチュード7.9の巨大地震が襲ったのである。細い柱の上に三州瓦を載せた数寄屋造りの家はひとたまりもなく潰れた。生後間もない美枝子は亡くなり、笑子は老女に庇われて一命は取りとめたが、老女は梁に打たれて絶命した。『ゆく河の流れ』(25ページ)にはその模様が描かれている。

関東大震災は、震源地に直面する湘南海岸東部一帯に大きな被害を与えた。東京のように大規模な火災こそ起こらなかったが、多くの家屋が倒壊し、海岸には

津波が押し寄せ、砂地の液状化現象によって井戸や庭池からは噴水のように砂混じりの水が噴き上げたという。

ここで災害の詳細を書き連ねるゆとりはないが、藤沢町当局及び町議会の動きについて『現在の藤澤』は次のように記す。

震災に処する善後策を研究し町の財政を考慮し町の趨勢を詳悉し、その復興発展を期すると共に救済応援を求むるを目的として、善後策委員会を組織せり。委員には町会議員と有志にて38名に嘱託しこれを 1, 土木並びに衛生科 2, 教育科 3, 勸業並びに社会科の各分科に分担し益々その実績を挙げつつある。

として、善後策委員連名の筆頭に高瀬彌一（市と誤る）の名がある。

弥一は愛児を失った悲しみを乗り越え、自宅の改築もそこそこに、復興対策のリーダーとして活躍せざるを得なかった。また、翌年には三男=三郎が生まれた。

4. 鵠沼新道線205号（通称《高瀬通り》）

関東大震災は、南関東の生活様式を人口分布、建築様式、インフラ整備、防災思想などさまざまな方面から大きく変貌させた。

ことに特筆すべきは自動車の普及で、きっかけは震災による路面電車車輛・路線の復旧に手間取ったことや〈T型フォード〉で一躍自動車の大衆化に成功したフォード自動車が、震災後間もなく横浜に工場を建てて日本に進出したこととされる。昭和にはいとダットサンなど国産大衆車の開発が本格化し、円タクが走り始める。人力車と大八車からタクシーとトラックの時代に転換したのである。

弥一は先述の《高瀬通り》《橘通り》を南西に延伸し、序章の冒頭に紹介した《こまわりくん》の走るルート建設に取り組んだ。これは今日《鵠沼新道線205号》という市道になっているが、実は高瀬弥一の提案により、数人の地主の協力によって私道として敷設された。道路は土地提供者の名を冠して《上郎（新二）通り》《宮崎（寛愛）町》《高松（林之助）通り》《小川町》《熊倉通り》などと名付けられ、土地提供を渋る所有者からは、弥一が自費で買い上げたという。

自動車交通を念頭に置いた道路には、道幅の広さと屈曲の少なさが要求される。公共事業として敷設される計画道路なら、法的な措置もあり、強制的にでも道幅と直線コースが確保できる。また、《鵠沼海岸別荘地》のように、何もない砂原に道路を通すなら、それも可能であった。

しかし悲しいかな、無人地帯とはいえ、砂丘列の間の細分された畑地や果樹園

の農道を繋いで拡幅する作業である。どうしても屈曲が多くならざるを得ない。

かくして1925(大正14)年5月、全長2970mの鵠沼新道は開通した。年末には東海道線、東京―国府津間の電化が完成し、交通アクセスの便が増した。

その翌年を東屋とその貸別荘で暮らした芥川龍之介の死後発表された『歯車』の冒頭に、「僕は或知り人の結婚披露式につらなる為に鞆を一つ下げたまま、東海道の或停車場へその奥の避暑地から自動車を飛ばした。自動車の走る道の両がはは大抵松ばかり茂つてゐた。」とある、その道である。

加藤徳右衛門は『現在の藤澤』の中で「地価も反当千円は難かりしも、一度道路の開通乗合自動車は爆音を立てて往来する状態となりて忽ち地価は暴騰し、沿道は坪当たり二十円台を呼ぶに至ると、日に月に別荘たり住宅たるもの建設さるは余りに道路の効果の顕著たるに驚嘆さる」と記している。

やがて昭和の初めごろにはこの道を通してバスが藤沢駅と鵠沼海岸海水浴場や海岸通り大曲を結ぶようになった。(69頁参照)

5. 江之島水道

大正が終わり、昭和が始まろうとしていた1926年12月14日、江の島の島民は待望の上水道開通の喜びに沸いていた。「江之島に水が出た時の父のうれしそうな顔は、今でも忘れられない。」と、笑子氏も書いておられる。

江の島は、地質構造上極めて水が得にくい。その上、人口集中地は明治以降の埋立地である。定住人口は少ないが、旅館街になっていたため、外来人口は多い。そういうわけで、恒常的に水不足に悩まされてきた。また水質も悪かった。島民は天秤棒を担いで栈橋を渡ったり、小舟を漕いだりして対岸の片瀬から水を運んでいた。この様子に心動かされた弥一は、資本金125,000円を以て《江之島水道株式会社》を創設し、自宅の敷地に井戸を掘り、旧江之島道に鉄管を埋設して、江の島に飲料水を供給する事業に着手した。

すなわち、当初は江の島への給水が主目的で、途中の片瀬地区にも分配しようとする程度だったが、次第に事業を拡大した。井戸も自邸のものでは間に合わなくなり、江ノ電の東側、石上地区に新たに内径2尺鉄筋コンクリート集水管延長61間を地下15尺以下の個所に埋設した。1928(昭和3)年2月には《玉川水道株式会社》系と提携して新たに《湘南水道株式会社》とし、翌々年には村岡村奥田の伏流水を水源に、鎌倉町への給水を計画。内務省に許可申請する。

6. 町会議員高瀬弥一と政争

『藤沢市史』第六巻の第四章『市制施行前後の藤沢』の冒頭に、12頁余り(614～626頁)を割いて『藤沢町政の変動と政争』が述べられている。要約すると次のようなことらしい。

1925(大正14)年3月の普通選挙法成立に続き、翌年1月には地方自治においても従来の納税要件と経済要件が撤廃され、25歳以上の男子で2年以上当該市町村に居住する者には選挙権・被選挙権が付与されることになった。さらに首長の権限や国の監督権が大幅に緩和されるなど、いわば大正デモクラシーの総仕上げともいふべき地方自治の改変がなされたのである。これにより有権者は一挙に4倍となり、1928(昭和3)年2月の最初の普通選挙では、当時の2大政党であった政友会と民政党をはじめとする各政党は、支持者獲得活動を活発化させた。

この総選挙の結果は、政友=218：民政=216(他無所属=24・無産政党=8)と、両派の勢力は伯仲していた。高座郡の属する神奈川3区では2：2だったし、高座郡出身候補者だけに絞っても1：1の同数が当選した。ところが、藤沢町における得票数を見ると、民政党の岡崎久次郎の1657に対し、政友会の胎中楠右衛門^{たいなか}は814と、民政党支持者は政友会支持者の倍いるという数字が示されたのである。

この民政党の岡崎久次郎を強力に支持したのが、後に“鵠沼派”と呼ばれる町会議員高松良夫(仲東)・加藤徳右衛門(引地)らであった。彼らはこれに勢いを得て、同年の6月に行われた神奈川県議会議員選挙に元憲政会前議員の広瀬善治(民政党・小出村)を支持した。藤沢からは無所属の葉山繁造(堀川生まれ)が立ち、藤沢町においては広瀬・葉山の得票争いが争点になると予想されていた。当初、高瀬弥一が出馬の予定だったが、なぜか早々と断念してしまったからである。ところが、立候補締切直前の5月28日、金子角之助町長の推薦で政友会^{こうろう}の上郎新二(川袋)が立ち、金子は町長を辞職してかなり強引な選挙運動を展開した。『現在の藤澤』によれば「高瀬氏の如きは一族郎黨を引き連れ陣頭に立ちて猛烈なる運動を開始す」とある。結果はどうなったかということ、高座郡選挙区定員4のところ、1位=岩本信行(政友)・2位=磯崎貞序(民政)・3位=高下才助(政友)・4位=上郎新二(政友)というもので、次点が小林興次右衛門(民政)、広瀬=6位・葉山=7位と敗れ去ったのである。

前回選挙までは高座郡の定員は3だったが、政友：憲政(後に統合して民政)の比率は1：2だったものが、定員4に増えて3：1という結果になったわけで、その原因は町政を抛り出してまで土壇場で上郎を担ぎ出した金子角之助にあると

する藤沢町民の批判が集中した。町長再選に金子を担ごうとする政友会議員に対し、民政党が真っ向から対立、“鵠沼派”の町会議員高松良夫・加藤徳右衛門らが中心となって“町政刷新運動”を展開した。この時、刷新運動に対立し、金子擁護の中心になったのが誰だろう、高瀬弥一なのである。

ここで、時代を20年ばかり遡って藤沢町政の概略を見よう。

1908(明治41)年4月1日、高座郡藤沢大坂町・鵠沼村・明治村が合併、藤沢町となり、6月8日には等級選挙を実施、1・2級議員合計各12名が選出された。その14日に招集された第1回藤沢町会で町会会議細則が可決され、初代藤沢町長に鵠沼村出身の高松良夫が選出されたのである。高松家は仲東にある鵠沼きつての旧家で、平安時代末に土着した法印と称する修験者の末裔と伝えられる。

1912(明治45)年6月19日、第2代藤沢町長として金子角之助が選出され、上述の上郎候補担ぎ出しで辞任するまで、4期16年間の長期政権の座に着いた。つまり、大正時代はそっくり金子町政時代だったのだ。この間、1921(大正10)年には全国町村会を結成し初代会長に就任して、軍事費を削り取ってまでの義務教育費国庫負担増額期成同盟を作ってその目的を果たした。

金子家は旧大庭村の名主を務めた家柄で、先代の金子小左衛門は、神奈川県自由党壮士として、板垣退助等の講演を積極的に推進した人物である。角之助は、1866(慶応2)年12月25日、高座郡綾瀬本蓼川の農民=武藤卯左衛門の三男に生まれた。羽鳥村に小笠原東陽が開いた《耕余塾》に学んだ後、14歳の時小学校の教師となり、18歳で南多摩郡の小学校長代理になる。その後教職を辞任して東京に出、自由党の文武館として建設された《^{ゆういつかん}有一館》に寄宿し、自由民権運動の活動家として甲申事変の後に外患罪で逮捕されたりもした。その活動が金子小左衛門に見込まれ、金子家の養子になったのである。

川袋の高瀬家と上郎家は隣同士だった。これは決してたまたまそうだったというわけではなさそうである。上郎というかなり珍しい姓を神奈川県近現代史の中から探してみると、次のようなことが判る。

明治26年の記録に上郎幸八・吉田 茂の共同名義で(大磯町)切通418番地木造板葺2階家41.5坪外2棟を買取ったことが記されている。すなわち“大磯の吉田御殿”の元である。もちろんここに出てくる吉田 茂とは、戦後長期政権を誇る“ワンマン宰相”のことだ。茂は旧土佐藩士で自由民権運動の闘士=竹内 綱の五男として明治11年に生まれたが、幼少時を横浜で過ごした(太田小学校で学んだとあるから、高瀬弥一の9期先輩にあたる)。明治20年に9歳で横浜の貿易商=

吉田健三の養子となり、以来、別邸のある西小磯で育ち、《耕余塾》に学んだ。

まだしっかり調べがついていないけれど、上郎家は大磯町西部の西小磯における有力者だったようだ。

続いて、上郎清助という人物が政友会から神奈川県会議員選挙の横浜選挙区で立候補し、1911(明治44)年・1915(大正4)年・1919(大正8)年の3期連続で当選している。すなわち、上郎清助が県議員だった期間と、金子角之助が藤沢町長だった期間とはほとんど重なる。同じ政友会系の地方政治家である。当然出会いの機会も多かったであろう。

上郎清助は、横浜信託会社社長で、貴族院多額納税議員だったこともある。現在の横浜市営地下鉄《伊勢佐木長者町駅》付近一帯は、震災前はほとんどが上郎の地所だったという。現在も長者町に《上郎ビル》が存在する。

そして、この上郎清助の弟が上郎新二なのである。

上郎新二に関する調査が極めて不十分なので断定的なことはいえないが、高瀬弥一と上郎新二の出会いは相当古いのではなかろうか。それは神中あるいは太田小学校あたりまで遡ることさえ充分考えられる。この両家の境遇を比べてみると、驚くほど一致点が多い。先祖は片や鎌倉、片や大磯の街外れの旧家であった。明治期に開港地ヨコハマに出て巨万の富を得た。また、この二人はお互いに極めて広い趣味を持っている。《趣味人》とでもいうべき人柄である。まさに肝胆相照らす親友だったとしても不思議はない。弥一は中藤ヶ谷から川袋に移った際、隣接地を新二のために用意して呼び入れたのではないかと筆者は睨んでいる。

従って、藤沢町政の変動と政争における弥一の一連の態度は、金子支持というよりも上郎新二支持の立場から生まれたものと考えられる。

上郎新二の当選直後、高瀬家では三女=八重子が誕生した。

金子町長再選問題は、長期間にわたる政争をもたらし、以後の藤沢町政を不安定なものとした。すったもんだの経緯をここで説明するゆとりはないので『藤沢市史』第六巻の614～626頁に譲るとして、昭和になってからの藤沢町長は、湯原直平(地方官僚 1929.1～)、隈川 基(海軍予備役軍医少将 1930.3～)、一木與十郎(陸軍予備役少将 1931.10～)、大野守衛(外交官 1934.5～)と、短命(大野は町長・市長を継続して8年務めたが)で、かつての地元旧家出身の政治家でなく、鵜沼・辻堂の新興住宅地に移り住んだ官僚・軍人・外交官が、政争に関係なく無難だとして妥協案で担ぎ出された形であることを指摘しておく。

高瀬弥一は、この政争に嫌気がさしたのか、2期で町会議員を終わらせている。

上郎新二もまた、県会議員は1期のみであった。

7. 実業家高瀬弥一の挫折

1929(昭和4)年4月1日、小田急江ノ島線が開通した。また、この昭和1桁の時期、鵠沼では鉄道省海の家や県営(後に町営)鵠沼プールの開設、引地川の河川改修、片瀬県道(現国道467号線)や湘南遊歩道路(現国道134号線)の敷設など大型公共投資が相次いでいた。これらによって鵠沼中央部の定住住宅地開発と海岸の観光開発には拍車がかかるはずだった。しかし、折からの世界恐慌は、日本経済に大きな打撃を与え、消費は急速に冷え込んでいった。いきおい分譲地は売れ行きが悪くなり、その収入を当てにした新規事業も思うに任せなくなってきた。

しかし、この段階までは弥一はかなり優雅な生活を楽しんでいた。狩猟や囲碁では番付に載るほどの腕前だったし、筋向かいともいうべき近所に移住してきた一高の恩師=杉 敏介(当時は一高校長)など文人との交流も盛んだった。

1931(昭和6)年3月、四女=由美子が誕生した。この出産には困難がともない、つるはすっかり健康を害してしまった。

昭和7年多額納税議員互選資格調査に基づく『藤澤町長者番付』では、弥一は22,150円で西方前頭5枚目となっている(因みに東方大関は1,037,442円の上郎新二)。この頃まではまだ長者番付に名前が載るほどだったのだが、昭和も2桁になると、かなり厳しい状態が訪れる。

本来公共事業として行うべき事業を先取りするような形で、弥一は独力で行おうとした。すなわち先述の道路と上水道である。これにはやはり無理があった。道路の方は、藤沢町に提供を申し出たが、受け入れて貰えなかった。その理由が何であるかは諸説があるが、結果として多額の固定資産税を負担せざるを得ず、これが弥一の財力を奪ったとされる。この道路はいわば私道である。従って、少なくともこれを利用するバス・タクシーなどから利用料を徴収すれば、若干の収益があげられたはずである。初めから道を町に寄贈する気でいた弥一には、そんなことは念頭になかったと見える。この後開通する湘南遊歩道路では、建設者である神奈川県が、道路開通後に沿線235m以内の地主から受益者負担金を強制的に徴収するという乱暴な手段を用いた。もちろん、私道でそれは不可能であろう。

水道事業は水道条例の規定では市町村営が原則とされており、企業が工場などに供給する場合などを除き、せいぜい個人的な引水が普通だった。弥一が経営した《江之島水道株》→《湘南水道株》などはかなり例外的なものである。そこへ、

これまた例外的に神奈川県が県営水道の開発を試みた。県営水道の嚆矢とされる。この計画は既存の横浜・川崎・横須賀の市営水道以外の水道未供給地に水道を敷設しようというもので、最初は大磯町から葉山町にかけての相模湾岸の市町村が企画された。その中間地帯に弥一の《湘南水道(株)》が挟まれるわけで、県は買収に乗り出した。当初は渋っていた弥一だが、ついに折れた。もちろん、買収だから幾ばくかの一時金が入ったが、将来に向けての収入源は絶たれた。

このあたりから弥一の経済的状況は目に見えて悪化したようである。

1936(昭和11)年3月14日、母=キクが他界した。それから1週間も経ず、20日には愛妻=つるがまだまだ幼い子どもたちを残してあの世へ旅立った。この出来事は、弥一に大きな精神的ダメージを与えたと思われる。長女=笑子氏は折角入学した津田塾を1年で中途退学し、家事と弟妹の世話をすることになった。

翌々年の7月、集中豪雨により氾濫した片瀬川の水は、川袋の低湿地に大量に流れ込んだ。下の池畔の隠居所にいた八重子と由美子は、浮き上がる畳により鴨居に達して、ようやく最悪の事態を免れた(59頁参照)。これにより、隠居所に置いてあった弥一愛蔵の書画の類は、ことごとく水に浸かった。

さらに翌々年には、川袋高瀬邸は人手に渡り、花沢町に300坪ほどの土地を得て、旧邸の離れを移築して住んだが、それも2年で、ついには片瀬町の^{にしかた}西方に借家して終戦を迎えた。この間、アルコール依存症が進行し、悲惨な状況から立ち上がれないまま、長男=弥太郎の世話で仙台の東北大学病院で寂しく息を引き取ったという。時に1954(昭和29)年10月5日。67年の波乱に満ちた生涯であった。

8. おわりに

「父さんは、東大の文科を出ているんだから、自叙伝でも書いてみたら？」三男=三郎氏をはじめ子どもたちは何回となく薦めたという。しかし弥一は言を左右にして応じなかった。おかげで、この実に興味深い人物の人間像は、長女=高瀬笑子氏の『鵠沼断想』(武蔵野書房1998:私家版)と『ゆく河の流れ』(武蔵野書房2002)にまとまって書かれている他には、加藤徳右衛門著:『現在の藤澤』(1933)と『藤沢市史』(第3巻1976・第6巻1977)から断片的に拾い集めるしかなかった。他、松沢正『神奈川県における水資源の開発と利用』(私家版1994)や神奈川県近現代史、横浜市史に関するホームページを参照した。高瀬三郎氏、吉川八重子氏からはお話を伺うと共に資料の提供をいただいた。篤く御礼申し上げる。

文中、物故者と未成年者の敬称は略させていただいた。(わたなべ りょう)

川袋の家の思い出——父に

吉川八重子（国分寺市在住）

青く広い空の下に明るくひろがっていた緑、点在する和風の家。いまでも懐かしい響きの鵜沼2370番地の高瀬のいえ。藤ヶ谷の祖父の7200番地から移り、父が新しく造ったこのいえは、藤沢駅から江ノ電をひと駅、高砂停留所を降りて西へ高瀬通りを少し歩いてきた所にあった。現在の石上駅、そして鵜沼桜が岡1丁目にあたる。

姉、高瀬笑子が『鵜沼断想』（1998年6月出版、私家版）に、「川袋の家のころ」として書いている。——「父は祖父の好みの豪邸を好まず、自分の好みにあったもっと小規模な、明るい軽やかな家を建てたいと思い、江ノ電の高砂（現石上）停留所一帯の土地を買い、その一部に数寄屋造りの家を造った。三河瓦の屋根に長い軒、廻り廊下の所々の柱は細く数も少ない……」の、この家。前に次兄から貰った写真でみると、まだ庭らしい庭も造られていない、広い廻り縁に藤棚の棚ばかりが目立っている新しい家に、祖母と父、そして母が2歳ほどの長兄らしい子どもと縁から庭先に降りている……という、静かな雰囲気が漂っている。父が提出している藤ヶ谷から川袋への転籍届には、大正9年9月10日となっているが、この家は10年頃には建てられたのではないだろうか。

この5000坪余りの土地は、半分が高台で、その下の方は沢地のようなものかもしれない。父はこの、下の方の土地を掘って、沼のような広い池にした。いまは藤沢



震災前の川袋高瀬邸と上の池 『鵜沼断想』より

駅から来る橋通りと、石上停留所の向こうからの高瀬通りは、分譲地の方へゆく四つ辻になっているのだが、この切り通しの坂道は下の庭の池の向こうの沢地や田が埋め立てられ、この分譲地になる時、その発展のために通されたものと聞いている。(その頃は、そろそろ小学生になろうとしていたような気がするのだが、川名の山の方からトロッコが土を積んでゴロゴロとくるのが珍しく、土をあけ空になって戻るトロッコに乗ってみたいとせがんで、ついて来た母に^{たしな}窘められたのを覚えている。)

沼のような池には、大小三つばかりの島があった。島の間を、2艘の舟に長い竿を使って上の兄たちが漕いでゆく。私たちが下の家と呼んでいた祖母のための離れのひと部屋が、池へと突き出ており、手摺から釣り糸を垂れたり、睡蓮の花が咲く間を脚のきれいなクイナが走って行く様子を見たりしていた初夏ののびやかな思い出。部屋から真向かいの島は、灯籠島と呼んでいたが、樹々のこんもりしたこの島に夜、灯が点ると、その風情はなかなかのものだった。樹の少ない平らな島はつくし島とかたんぽぽ島とか勝手に名付けていたが、何か1本だけ上の裏庭のものより美味しい枇杷の実がなる木があることだけが魅力の島だったように思う。(切り通しの坂道によって、後に一部分断されたこの池と、東側の土地は、釣り堀になったり分割して売られたものと思う。)

父は、高瀬通りを更に鵠沼海岸へ向かって道路を拓くために、その周りの土地を大分買ったそうだが、この切り通しを通したこちら側、すなわち邸の東にあたる部分が地価の最も高い所であったとよく私にも話していた。植え込みが深々として自然の森とさえ感じさせるようになった一角に第一の門があり、私たちはそれを大門と呼んでいたが、大門は車でも入らない限りはいつも閉じられて、脇門をくぐって入るのが習いであった。泰山木や榎、椎の巨木が繁る、昼でも暗い小砂利の広い道を進むと、左手にパッと明るく芝生が展けて玄関に出る。芝生には起伏があり、中に豆菖蒲が可愛い顔を見せ、時にツンツンとピンクのネジバナが丈を延ばしたりした。鬼ヤンマや銀ヤンマ、美しく蝶が飛びかう広いところで、私たち末に近い子どもたちは思う存分遊び廻り、昆虫採集も植物採集も遊びのうち、草野球もたたかいごっこにも走り廻っていた。百年松が何本か昔の姿を残しており、秋にはこんもりと鞠のような形で萩が咲いた。〈昭和2年生まれの私のこの記憶は、前述の写真の、関東大震災前の家ではないが、この母屋の玄関と次の廻り縁の部屋などの趣は大体写真の家の配置と同じようであった。大正12年の

大震災で、建てたばかりの写真の家は見事にペッシャンコになり、壊れずに立っていたのは煉瓦造りの二階建ての蔵だけだったそうである。（この蔵は後に戦争中売却された邸内で取り壊されるのも最後になっていたと聞く。）姉の記憶によれば、大正12年当時、家はすっかり電化されていて、お昼時でも火事は起こらなかったし、9月1日生まれ姉の誕生日祝いのお赤飯も炊き上がり、オーブンはケーキも焼けていたという。古い戸籍簿を見ると、この年7月に生まれたばかりの私の次の姉が、潰れた家の離れの部屋で亡くなり、また大きな梁の下になって、6歳の姉をかばって親戚筋の人も亡くなったという。父はこの赤ちゃんのことを「死ぬ子、見目よし」と話して悲しんでいた。3番目の兄は、その翌年残った蔵の中で生まれたのである。）

芝生の向こうには、上の池と
いっていた大小
二つの池があっ
た。震災のあと、
父は家造りより
も庭造りに精を
出していたとい
う。コンクリー
ト造りの池だ
が、虹のように



長く形の良い土

太鼓橋の架かる川袋高瀬邸上の池 『鵠沼断想』より

の橋が架かり、樹々の繁みの岸からの路を絵のようにかたどっていた。石の灯籠の傍らに笑っている父や祖母、可愛い恰好の姉や長兄の写っている写真では、池にはなみなみと水がある。しかし父の話によると、地震のあと、どの箇所か判らないひび割れのためか水漏れして、どうしてもこの広い方の池には水がためられなくなってしまったのだそうで、私の記憶の中では、路も橋も、中の大きなまん丸の石までもが、池のコンクリートの底からむき出しの儘になっていた。水路続きにある小さい池の方は健在で、これは相応の石の橋の上から、鯉や鮒が優雅に泳ぐのを眺めることができた。次兄がこの短い橋から滑り落ちた時のこと、母が慌てて人を呼んでいたことなど、遠い記憶の中に思い出される。岸の奥の楓や錦木の紅葉が、秋ともなれば美しく、絵が好きだった小学生の私は、よくこの小

さな森を写生した。父と庭師が丹精して造り上げた頃には、この二つの池と迂回した水路の水は、ずっと流れて離れの前庭を通り抜け、木々の下、岩陰をくぐり、遂には滝となって下の庭へと落ちる。いわば林泉であったであろう。その流れが枯れた後、この水路は夏の豪雨のとき、大門の方からくる水までも流す役をして高さ4に近くもある滝石を、水煙を上げて下の滝壺に水を落とした。うす茶色の水であっても滝の落ちる様は形容しがたい程の壮観であった。普段は、こんこんと清水が湧き出しており、苔むした岩陰に真っ赤な弁慶蟹が姿を見せたり、目高が泳いでいる静かな滝壺も一時一瞬にして変貌するのである。真夏の豪雨は、ものの10分程荒れ狂った後、からりと晴れ上がった。西の空に雲の切れ間から太陽が輝き出す。塵を洗い流して鮮やかな緑の木々、下草の露までが緑に光る夕立は、庭の植え込みも垣根も越えて鵠沼の道々をさっぱりと洗い、美しくした。下の沼地の岸はニセアカシアの林になっていて、春になるとやさしく芽吹き、白い花房を風に揺らす初夏にはよい香りがした。続く分譲地への境は簡単に針金であらくめぐらされているだけであったから、こちら側からよく見えない処では中に入って鮒釣りをしたりして遊んでいる少年の姿もあった。(富士山は見えたかどうか判らないが、分譲地には「富士見が岡」という名がつけられていて、見晴台のような櫓が建てられていた。夜も9時近く、二つに割った西瓜とスプーンを抱えて姉とこの台に上って行き、星を眺めながら夕涼み？をしたことがある。)

上の庭に特に大きな石が三つあった。最も大きくてよく登って遊んでいたのが、玄関脇のライオン石。カラ池になってしまった池のそれこそまん丸の大石……八幡様の太鼓橋より丸くてとても登れなかった……父が大事にしていたと思われる苔むした長四角の石……その窪みにたまる水で、小鳥たちが遊んでいるのが居間から眺められた……。記憶に鮮明なこれらの大石は今は何処の庭園にあるのだろうか。苔石の周辺は椎や楠、アオキなどが鬱蒼として、夏でも冷え冷えとしていたが、秋ここに落ちる椎の実のはなにしろ家中の椎の中で一番のものだった。大きく細長くつややかで、あのような形のよい実の生る木はなかなかない。私たちのお目当てはこの木の他3～4本のよい実を落とす木で、ものの数分も拾えば渦巻きの蚊取り線香や羊羹の箱に山一杯になった。火鉢にかけたほうろくで、ゾロゾロと揺り動かしながら焙っていると、ずっと縦に皮がはじけてきて白い中身が覗けばもうそれでよい。爪でパチンと両側へ割っては熱々の実をフウフウいいながら口に抛り込む。思い出の中の、あの鵠沼の椎の実、椎の実の落ちる頃……ほ

んとうに懐かしい。

カラ池の中の丸石がいつ頃なくなったのかはっきりしないのだが、池の中のコンクリートの空き地に末兄が1坪程の土を入れて貰って花壇造りを楽しんだ。ポピーとか矢車菊が、表庭にも裏庭にもないハイカラな雰囲気を見せてよく咲いた。

(兄は小さな温床をその花畑の中に作るという、ガラスのはまった小さな窓のようなものを斜めに据えた箱を埋め込んだものである。たまたま門の外の通りを、大八車を引いて、牛ではなく馬が蹄の音をさせて通り、その蹄の音がはたと止む。

「それ行け」とばかり命令がとんで、子分は割り箸を持って門の外へ……。馬が道路の真ん中に立ち、脚先にはほかほか湯気の立つ馬糞が——。お饅頭を持ち上げるようにそれを拾い、枯葉と一緒にして温床の土の下に敷き込み、かくして簡単な子どもたちの温床工事はすすむ。馬糞拾いなどはあまり嬉しくない下働きであったけれど、やはり何となく懐かしさを覚える想い出の一つである。)

裏庭には、梅、桃、八重桜、エゴの木の花がよく咲き、緑の中に^{ザクロ}石榴の赤い花も可愛らしく映えていたが、表庭の^{ドウダン}満点星やツツジ、サツキが咲き終わる頃、真昼の日差しの下に夏を謳歌するように^{サルスベリ}百日紅が大きなひろがりを見せ、芙蓉の大きな花もピンクや白によく咲いた。さすがに庭師が丁寧に植え込んだ小菊の群れや滝壺の方のアヤメや花菖蒲は見事な景観で、暗い繁みの中の泰山木は大きな株で香りが素晴らしかった。色々の樹の花や草への関心は季節のうつろいと共に自然に育った。豊かなゆっくりとした自然のなかに、それはたしかにあったふるさとの時間である。

父の水道事業の名残が、川袋の家の一隅にあった。切り通しで分断された東側の土地の一面に「水源地」と呼んで私と妹が時々冒険に行った処。蓋のきちっとした丸い大井戸が二つ、汲み上げ用の太いパイプ等がいかに配置されたコンクリートだけの地下室へと階段を下りてゆくと、夏は殊にひんやりとしてコンクリート特有の匂いが強かった。危険なこととて何もない、ただ、この匂いだけが冒険を思わせる場所だったのかもしれない。事業の初期に造られたこの場所は、すぐに第二の水源地へ移ったあと、使われず放置されていたのであろう。第二水源地は、江ノ電の線路の向こう側、宮澤さん宅の方に造られた。

——父が大正15年に創った「江之島水道(株)」は、昭和3年から5年へかけて「玉川水道(株)」と提携することになり「湘南水道」となった。更に昭和8年に神奈川県営水道に売却される。——

父好みの家の造り

父は洋間のある和洋折衷の家を好まなかったらしく、また二階家も好まなかったようである。表玄関を入ると大きな靴脱ぎ石と式台、四畳半位の玄関の部屋があり、式台を上がり左へ広い廊下の方へ出ると広間になっていた。広間には家具がなく、真ん中で一人碁盤に向かって正座している父の姿があった。うすべり敷きの広縁は廻り縁で、桜の季節には樹の梢から花びらが舞い込み、藤棚の長い花房が五月の風に揺れていた。叔父や叔母の他、囲碁の客くらいがこの部屋の客であったようである。廻り縁は離れに通じる廊下に出るのだが、この部屋の一方の西側は、暗く冷たい感じの廊下で、一部は蔵の入口へ一段上がるようになる。先の震災で蔵だけが健在であったため、何となく変な間取りになっていたのかもしれない。

内玄関の土間は狭く、半間四方くらいだった。すぐ左手に女中部屋、右の食堂兼居間へと行く通路は、洗面所と電話室。洗面所はやけに奥行きのある銅の流しが幅も広くて何人も並んで洗面出来たのだが、流しの前は横窓で、鏡などは粗末なものが端の方にかけているだけであり、父の剃刀用の細長い研ぎ革が下がっていた。玄関の部屋への曲がり角の手前に呼び鈴の集積器のような箱がついて、離れまで通じている呼び鈴が、その番号の蓋をパタパタと上下に開閉して使用人に知らせるようになっていたらしい。電話は藤澤の14番だった。玄関部屋の前は腰掛け窓のある畳敷きの通路で、この窓の磨り硝子の一こま一こまに、中学生だった頃の兄が描いた漫画絵が何故か消されることなくあった記憶がある。兄のいたずら描きは、ライオン宰相と呼ばれたという浜口雄幸^{おさち}で、兄が尊敬していた政治家だったと思うが、今考えてもこれはうまく画けていた。

大門の次の裏門を入りしばらく来ると勝手口へと真っ直ぐに出る。台所の右手の手前のスペースはやや広い硝子戸のない所で深くて良い水の井戸があり、大きな木の冷蔵庫が据えられたあった。氷屋さんがシュッシュッと氷の塊を鋸で切って入れてゆく。天秤棒をギシギシとしならせて、腰越から鮮魚を運んできてくれる幾さんが、このスペースの前で荷を下ろし、冷たい井戸水を汲んで魚をさばいてくれるのをよく眺めていた。泥のついた野菜なども、この辺で処理してから台所へ入ってきたのだ。内玄関へと来る所もコンクリートのスペースで広く、ローセキでいたずら描きをしたり、石蹴り遊びをしたりした。左手の地下室のある物

置に自転車などを入れたりしていたが、入り口の左手の地下室の明かりとりのレンズ窓から下を覗くと、馬鈴薯や玉葱がゴロゴロと並べて格納してあり、ここを更に曲がって女中部屋の脇から表玄関の前へと出ることになる。台所と配膳窓で繋がっていた居間は、震災前は浴室だったといい、天井を仰ぐと温泉宿の浴室の天井のような造りで周囲は黒の御影石のへりに囲まれている、説明されなければおかしい感じの部屋であったが、家族みんなで並んで食事の出来る大きなテーブルがあって、離れの勉強室へなど行かずにここでよく学校から帰って宿題等したのを覚えている。父に何か聞きに行くのにもよい距離であった。

浴室は井戸端のスペースから台所の入り口の右側の通路をちょんちょんと敷石を踏んで七八歩、西日のよく入る五右衛門風呂の洗い場と広い脱衣場があり、明るく温泉気分であった。楕円形の鉄釜の底板も重くて子どもにも女の人にも手に負えぬ感じ。勤めを持たず、温泉の好きな父が、何かにつけては一日に何度もお風呂場へ行く姿が今でも目に浮かんでくる。焚き口は右手の続きの小屋で、まわって階段を下りてゆくと、堅固な大きな焚き口が鐵の扉の向こうにあり、脇には庭の手入れの時に出た松や杉、檜などの枝が束になって積まれていた。そのままバンバンと投げ入れられて、お湯もなかなか冷めなかったようである。子どもの頃の感触、記憶だから、ともいえなくて、やはり相当に大きかった。

私はよその二階のある家が羨ましく、時には蔵の一階の仏壇の置かれている前を横切って、広い階段を上り、家で唯一の二階へ上ってみたものだった。確かに普通の家の二階よりは高く、重い両開きの窓からは百両山——私たちはここを五郎助ホウホウの森と呼んでいたが——の端から右手へ、本鵠沼の方まで、また左手には川名の山の方を見渡すことができた。何よりも「鵠沼の風」が快かったのを想い出す。祖父の時代の物らしいベッドや——私は金のベッドと呼んでいた——衣装箆笥のようなもの、机や椅子等があった。一階には父がケッカイとか呼んでいた洋風の抽出がずらりと並んだ帳場のための仕切に使われる大きな洋箆笥様のものがあり、壁際には雛人形や五月人形の箱が積み重ねられていた。その床下はすべて地下室になっていたのであるが、何となく湿度が高くて余り気分の良い所とはいえぬ。祖母の丹精の梅干しの甕や、梅酒の瓶などが棚に並び、蓋に被せられていた和紙には祖母や母の筆文字が出来上がった年月日を示していた。重い空気が漂っていて、他にも何や彼やあったと思うのに、鼠や青大将の出そうなのこの場所のことははっきりした記憶がない。ただ、梅干しが作られる工程を見るのは子供心にも好きだった。

蔵への入口を右に見て通り過ぎ、仕切の両開きのドアを押して、庭の地面の傾斜のままにトントンと渡り廊下を下って行くと、左手はくり抜き窓から芝生が見え、右手に夜具戸棚があって、同じような両開きドアを押して離れへ出る。狭い普通の廻り縁のある、ただ明るく開放的なだけの建物であり、床の間付きの八畳二間と板敷きの勉強室、これと門の方にやや近く硝子が入っていない軽い細かな格子戸の玄関。からりと開けて入るとタタキのがらんとした感じの玄関で、肘掛け窓のある玄関の部屋、それだけであった。板の間の部屋はまさに細かく仕切られた戸棚、物入れの作りつけが特徴。子どもが多かったからなのか、その数だけ整えられていたのだろうか。トイレは母屋の水洗と異なり、深い処へ吸い込まれて落ちていってしまいそうな感じがして、子どもの時は怖くて気分の良いものではなく、窓からは柿や石榴や椎の木の繁みのために空は見えなかった。しかし、南側の前庭から入る風は、真下の池を渡ってくるために涼しくて、夏休みなどには殊に快適でゆったりした時間があっただろうと思う。そしてここは続いているのに独立した子どものための場所で、裏門からも表の芝生の方からも自由に外から入れて便利でもあった。三門はお隣の^{こうろう}上郎さんの築山との境に近く、この門から築山の下^のの3〜40坪の竹藪に沿って行くと一軒離れて独立した家があった。この家はいつも人に貸していたが、この竹藪から採れる筍は素晴らしくて、掘り立てのその美味しさは天下一だった。忘れることの出来ないものである。



下の家——と私たちは呼んでいた——は、祖母のために建てられた茶室のある素敵な家、子供心にもそれは贅沢な造りのものだったと思われる。上の庭からの崖は、カーブした石段でこの下の家へと導き、左手

川袋高瀬邸隠居所と下の池 『鵠沼断想』より

にすぐある滝石と滝壺の風情を眺めながら玄関に入ると、二畳の狭い玄関の部屋から正面に廊下、左に潜りのある茶室、続いて天井の高い客間が続く。茶室側に

透かし彫り、一段と下った次の間側には格子の嵌めこまれた欄間があったような、あるいはどちらかに統一されていたような、今考えるとやはり両方あったようなあやふやな記憶になってしまっているのだが、よい床の間に書軸、よい部屋であった。池へと突き出て一段下がっている明るく楽しい部屋の方は、晴れた日には池の面のゆらぎを映して天井にはちらちらと陽炎の影が遊び、この離れには美しさとやすらぎがあった。父も時折書見に行っていたとみえ、母にいわれて「お父様、おひるのごはんです」と内線電話で呼ぶと、「八重子の声は高過ぎてよく聞き取れないよ」と、時に言われてしまったものだった。この家には祖母に続き母も逝って、その後4人だけの家族になったとき、母屋を他人に貸して一時移り住んだ。お風呂は母屋に入りに行ったので、浴室を板張りにして妹と私の勉強室にして貰い、楽しかった。狭くても明るく便利な台所、トイレも狭いけれど足踏み式の水洗が水圧も強くて快かったし、陽当たり抜群、表の道路からも遠くて、まったく別天地だったと思う。

（しかし、この大好きだった家は、水害に見舞われて、昭和13年(1938)7月のあの時から放置されてしまったのだ。6月の末近く、毎日毎日降り続いていた雨。片瀬川から溢れた水は下の分譲地の家々より床上1.5m程も高く浸水した。夕方、通いの婆やが帰り、たまたま東京に出ていた父も姉も帰宅できなくなり、夜中にこの大水に遭遇した私と妹は、昼ごと浮き上がり持ち上げられ、欄間のある長押の処に腰掛けていた。あそこが危ないと玄関の部屋の小窓を壊して入ってきてくれた魚林^{うおりん}さんの舟(木箱)で助け出された時は、水を吸って沈んでいく量もあり、家の外側は中に電灯が点いていたためかビリビリしてさわるのが危険だったらしくて、目覚めた時には点いていた電気も消され、真っ暗になったあとは相当に恐ろしかった。

水が退いたのは何日くらい経ってのことであつたか、積み上げられた畳や建具などの臭いは忘れることができない。父の和綴じの蔵書や姉の洋書など大切にしたいものが使い物にならなくなり、和服は裏の紅絹^{もみ}の色が表に染みつき、仕立て直しをした後々まで水害の痕を残した。床の間には、杉敏介先生のお軸が掛けられていたのだが、表装し直して貰ってもひたひたと押し寄せてきた床上浸水の痕が歴然として、此处まで水が……との驚き、そして悲しみの記憶を大人になっても呼び起こされることになった。後年問わず語りに聞いた話では、水嵩がやや退いてきた頃、池から溢れ出た鯉や鮒が手づかみで捕れたという。池の水面が漸く元に戻り、友だちと池の傍らで遊ぶようになった頃には、島には葦が繁り、牛蛙

（食用蛙）の大繁殖があつて、舟も朽ちたままの池を父は荒れるに任せてしまった。竹藪の太い孟宗竹を切つてこの蛙を釣ることに一生懸命の人がいたり、面白いこともあつたけれども。）

使われていない建物が道路に近く背を向けて二つあつた。勝手口への通用門の傍らに大きな車庫があつた。大門に迂回する道へ向かつて観音開きの扉のkeyの鉄の棒を、学校の運動場の鉄棒よろしくぶら下がったりして雨の日でも外で遊びたい時は便利だつた。離れの前庭の大きな合歓の木のそばに兄たちの鉄棒があつたのだが、これは高くて跳びつくこともできなかったのだが、青年になった次兄の「鉄棒」は形が良くて、見せて貰うのが楽しみだつた。茅葺き屋根に草が生えだした間口の広い中二階のある田舎風の物置も使われなくなつてそのままになっていた。もとはおそらく男衆のためか門番の家族が住んでいた家であつたと思われる。脇の狭い所には昔は大勢で餅搗きも、と思われる臼や農具が放置されて土間の板の簀の子の上に埃だらけになっていた。祖母や母の元気だつた頃には、五月の茶摘みのあとにこの物置の入口の広い土間に据えられていた焙烙^{ほうろく}で庭のお茶が作られていた。母屋へ続く離れの玄関へ出る砂道の片側にお茶の木が植えられており、姉さん被りの何人かの人によって摘み取られた大茶のお茶の葉、最後には土手を壁土のように塗り固められた炉に炭火が入り、和紙が貼られている焙烙の上で煎られ手揉みされて「お茶」の体裁になつて行く。子どもの記憶で、手順などわからないがそんな作業を離れて見ていたものだつた。梅干し作りは、お茶よりも少し後まで続けられていたようである。塩漬^{しんじけ}けを終えた梅の実が台の上の簾に綺麗に並べられて天日に干されていた。塩がふいて乾いていき、三日三晩雨を避けては丁寧に扱われ、酸っぱい良い香りを放っていた立派な梅。お手伝いと称してひっくり返すのが面白い遊びの一つでもあつた。お風呂の焚き口の方からくるこの空き地は、洗濯物の干し場でもあり、虫干しの時期には部屋の中から溢れた衣類が紐に掛けられて風を通されていたり、伸子張り^{しんしげ}をする場所でもあつた。何か生活に密着した自然な営みがあの頃にはあつたと思う。

上に三人の兄がいたし、ご近所の友だちも集まってきたもっぱら外遊びが多かつた。蜻蛉^{とんぼ}釣りや蟬取りの夏休みには、片瀬海岸行きも加わつて、大いに日焼けして過ごしたが、冬には家の中での楽しみも沢山あつた。ままごと遊びやお人形ごっこ、お医者さんごっこごっこ遊びもみんな好きでやつたけれど、大火鉢やストーブで暖かな夜、父が入ってくれたトランプや百人一首となると、大人の仲

間入りができた楽しさで、その記憶は鮮やかである。貼り替えられた障子の白さ、明るさに、皆集まっの新年、クリスマス……母が亡き後も姉がしっかりと私たち兄弟姉妹を見守り教育してくれたことは、何かにつけて感謝いっぱいの思い出になっている。父は教会へ行かない人なのに賛美歌をよく知っていた。学校の唱歌もうたったり寸劇をしたりして、姉の指導で家の中はにぎやかなところとなった。父はどの遊びも上手だった。弓、鉄砲、泳ぎ、山歩き……若い頃の趣味が歳をとっても基礎がある故か巧みだった。料理も工作も、剣道も。

私のふるさと、鵠沼

妹が生まれた頃には、すでに世界的大恐慌の波は荒れ狂っており、国は十五年戦争からそして敗戦へときびしい歩みを続けるのであるが、土地は売れず、税金は滞納し、銀行等からの借金の利息もたまる一方であった。父は逆境になっても身を落として働くこともできずに、姉たちに言わせれば調子の良いことを言うばかりで生きていったことになる。しかし、『貧すりゃ鈍する』ではいけない」とよく私に語っては、貧しくなっても人生をまだ楽しもうとする余裕を持ち合わせていた。飄々としていた晩年の父の姿を想うとき、ただ懐かしいとの小学生の頃までのメルヘンの世界でもなく、私の「ふるさと鵠沼」を極端にまで美しい幻想としてとらえることなく、辛いこととも結びついている少女の頃が自分史の追認の一部となる。

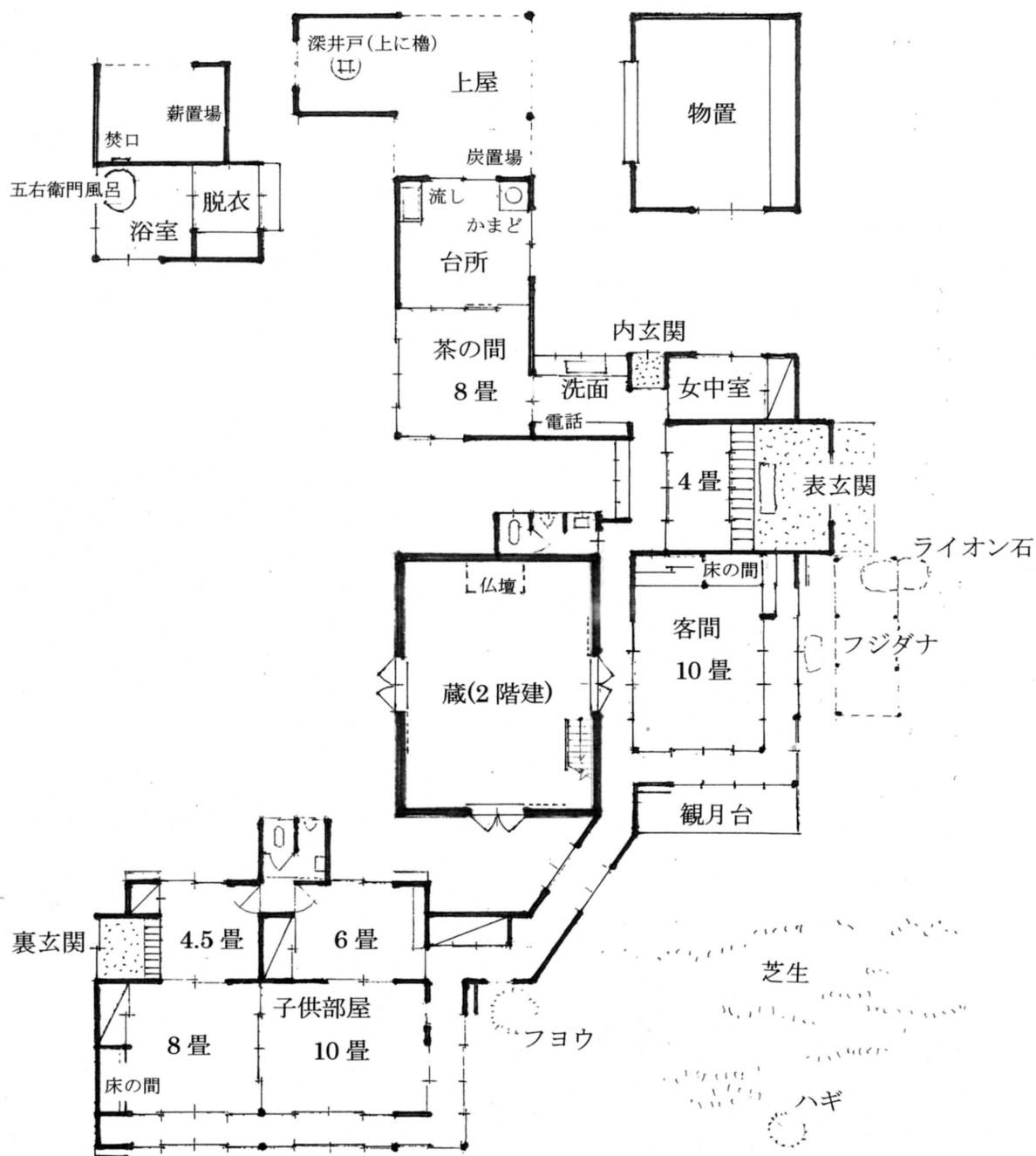
私の鵠沼での生活は、太平洋戦争の始まる昭和16年(1941)に、漸く大部分処分された邸から、鵠沼1861番地(現鵠沼花沢町)の300坪ばかりの所へ、渡り廊下でいった離れの部分を移築して住んだ後、此処もまた人手に渡すことになって、遂に終わることになる。生まれ育った家は今は跡形もなく半世紀以上の歳月も流れているが、周りの黒松の林も桃畑も麦畑も海へたどる道とともにはっきりと脳裏に蘇ってくる。日昏れまで大勢で砂滑りに打ち興じた、あの高砂山^{たかすな}の情景も、浜屋顔や月見草の花の淡い美しさと重なって生き生きと思い出されてくる。

日本の戦後史の歩みとともに、鵠沼もすっかり変貌したが、「これから創り出されて行く鵠沼、ふるさと」のあることを思い、この歳まで生きて、さわやかなふるさとの姿を、これからも見守って行くことのできる幸せを、このごろ深くかみしめている。

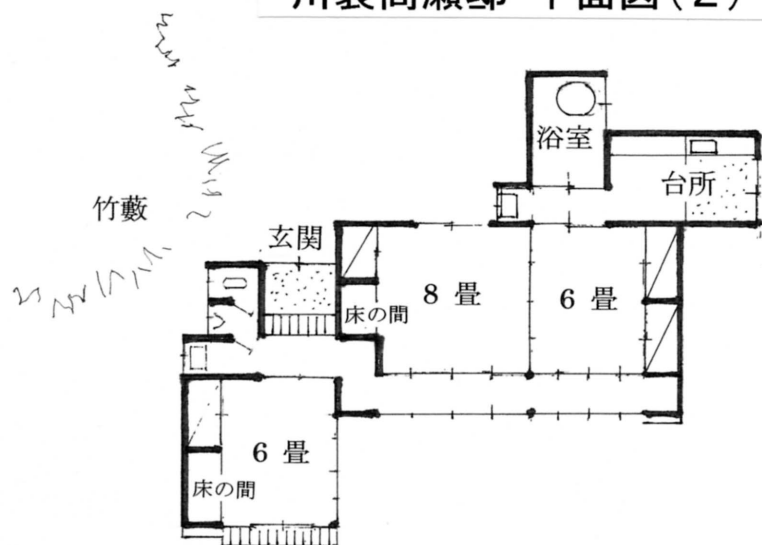
(よしかわ やえこ、高瀬弥一の三女)

川袋高瀬邸 平面図(1)

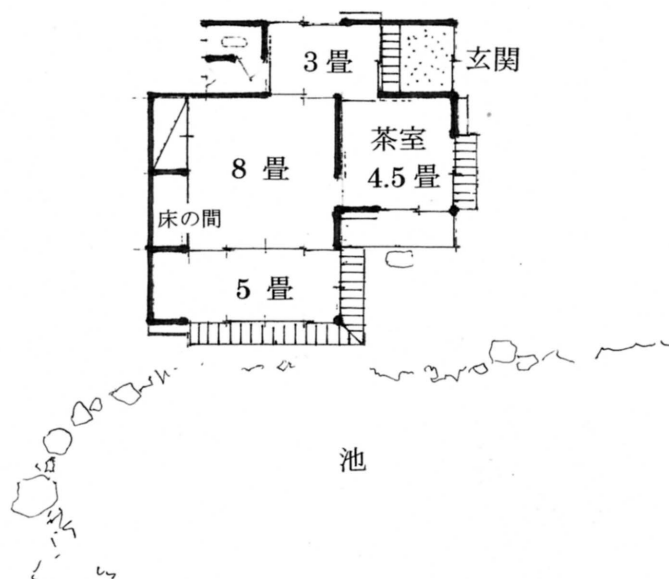
原図：高瀬三郎／製図：岡田哲明



川袋高瀬邸 平面図(2)



離 屋



祖母隠居所

至ふじさわ

江ノ電たかすな駅 (現：いしがみ駅)

至くげぬま

安部邸

大谷邸

橋通り

第1水源

上の池

主屋

車庫

高瀬通り

茶畑

離屋

隠居所

滝

中の池

島

下の池

島

島

旧秩父宮邸

上郎邸

上郎通り

川袋高瀬邸建物配置および庭園図

高瀬弥太郎君を偲ぶ

梶倉 健（会員）



高瀬弥太郎(1919-1991) も物静かに話す内向的ともいえる少年であった。

2, 3年生のころであったと思うが、昼の弁当を持ってこないことがよくあった。当時は、ご大家の彼が欠食などとは思ってもよらなかったが、昭和8年ころといえば父弥一が、道路の開設や水道の敷設事業に巨額の私財を投じ、家計は火の車で日々の生活にも事欠く有様であったのだ。

彼は湘南中学を卒業し、水戸高校（旧制）を経て仙台の東北大学に進む。卒業後日本興業銀行に就職する。昭和20年代の後半、興銀仙台支店に勤務のころに父弥一を引き取る。アルコール依存症で痴呆も始まる老残の父を介護し、その最期を看取った。

先年、水戸高校に進んだ湘南中学の先輩から電話があり、たまたま同期の弥太郎が話題になった。先輩の話では、彼が亡くなる少し前に自叙伝を送ってきたという。彼とは卒業以来会っていないし、懐かしくその自叙伝を借りることにした。

自叙伝は自費出版したもので、書名は「短編集 夏草」となっている。

「夏草」の巻頭の一編が「若草」である。主人公の出身大学を京大とするなど若干のフィクションもあり小説風ではあるが、内容は、隣のK家のことを始め小生の承知しているところと一致する箇所が多く、彼の自分史といえるものだろう。

「若草」に触れてみよう。、自らを擬した主人公は古希を過ぎた学者で、山口県防府市に隠棲している。ストーリーは、老学者が、知り合いの女子大生に儚く破

れた己の初恋を回想して話す形で始まる。

初恋の相手は隣の K 家の信子嬢であった。K 家も県下有数の資産家で、広い敷地に豪邸を構えていた。隣家のよしみで信子嬢とは中学時代から付き合っていたが、長じるにつれて恋心が芽生えてくるのは自然の成り行きであろう。昭和15年、大学2年の夏休みに信子嬢との逢瀬を楽しみに帰省した彼は、当夜、早速に隣家を訪ねた。そこで窓越しに見た意外な光景に動転する。シャンデリアの輝く応接間で、何と同級生の T が、信子嬢と顔を寄せ合うようにして何かを見て話し込んでいるのではないか。翌夜、意を決した彼は、信子嬢に会い真意を探ろうとしたところに T が現れる。そのときの信子嬢の様子を見てみると、どう見ても自分よりも T の方に好意を持っているようだ。T のような奴にと、自尊心を打ち砕かれた彼は、帰省を僅か 3 日で切り上げ悄然と当てもない旅に出、以来、信子嬢と会うことはなかった。

戦時中、彼は軍役に服するが内地勤務であった。そのときの下宿先の女主人に見込まれ、終戦の直前にその娘と結婚する。新妻を伴い 6 年ぶりに故郷の鵠沼に帰った彼は、妹に激しくなじられる。信子嬢は、彼の復員を待ち続けているのだという。ライバルと思いこんでいた同級生の T も、実は信子嬢の進学に備えて頼まれた家庭教師に過ぎなかったのだ。しかし、時すでに遅し！

恋愛なくして結婚はすべきでないというのが彼の信念であったが、この結婚は、終戦直前の混乱期のこととはいえ、彼の信念に背くものであり、軽率であったと悔やみ悩む。しかし彼は、妻には何の罪もないことだと、独り十字架を負い続けた。そうして二十余年が経ち結局、銀婚式を目前にしてついに協議離婚する。

「若草」の最終章において年老いた学者、すなわち弥太郎は述懐する。

「自分の家が零落し、信子嬢の家と格差ができてしまったし、T の出現などの事情もある。それにしても、なぜあのときに信子嬢の気持ちを確かめなかったのか。それだけが悔やまれる。もし確かめていたら、人生はだいぶ変わっていたろうに。これもまた宿命か」

先輩に贈られた「短編集夏草」には彼の短い手紙が添えられていた。この手紙は、彼の病が篤くなり、極度の貧血で緊急入院する前に夫人が代筆したもので、「病床に伏し、望郷の念止みがたく……」とある。彼は定年後、故郷の鵠沼を捨てて防府市に住んでいたのだ。手紙の日付は平成3年4月2日となっており、その2ヶ月後に72歳で永眠する。(敬称略)

(ししくら たけし)

山口寅之輔と松島苑住宅地

有田 裕一・佐藤 和子（会員）

鵠沼藤が谷、桜が岡あたりに住んでいると、“松島苑”という地名を耳にすることが多い。特にタクシーを利用する場合、この地名はとてのわかり易いようだ。かつての松島苑住宅地の中を通っている道は、通称“松島苑通り”と呼ばれているが、正式には鵠沼南部のいくつかの道（高瀬通り・上郎通り・宮崎通り・高松通り・熊倉通り、さらには一木通り等）同様に道路開設者山口氏の名を取って“山口通り”とされている。

松島苑は松島さんが開いたのか？ 開発はいつ頃から……？ なぜ松島苑と呼んだのか？ 松島苑通りと山口通りとの関係は？ 等々の疑問を耳にするので、分かる範囲で調べてみた。

〈松島苑住宅地の開発〉

開発した人 山口寅之輔

高瀬笑子氏の書かれた『鵠沼断想』によると「……東屋に泊まったのは大叔父山口寅之輔が松島苑住宅地を始める前……」とあり、山口寅之輔が着手したと思われる。寅之輔は高瀬三郎（山口家より高瀬家に養子に入る）の末弟。父、山口義高（延之助）は土地開発に壮大な計画を持った人であり、また兄、三郎も貿易で財を成して、藤ヶ谷に2万坪の土地を求め、土地の人から“鵠沼御殿”と称されるような土地・建物を持った。また寅之輔の甥（兄三郎の長男）彌一も川袋に居を移した後、鵠沼の道路開設、更には自邸の庭に井戸を掘って江の島までの水道敷設等々、鵠沼の開発に総力をあげていた。このような周囲の環境の中、三郎の弟、彌一の叔父にあたる寅之輔も、当時高瀬家に出入りしていたこともあって鵠沼藤が谷方面の開発に着手したと思われる。

注：11頁に書かれてあるように、山口寅之輔は高瀬三郎（旧山口三郎）の弟ではなく、兄高重の子高久（寅之輔）という説もある。この場合は三郎と寅之輔は従兄弟同士。

松島苑住宅地開発の時期と名の由来

昭和8年刊行の加藤徳右衛門著『現在の藤澤』藤沢における別荘住宅地の項に

松島苑住宅地一鵠沼南部海岸 事務所 有田金八 電話二六番とある。

これによると分譲販売の事務所は有田金八(当時町会議員)が引き受けていたようだ(但し、同家にはそれに関する書類等なく、詳細は不明)。

具体的な時期だが、旧土地台帳謄本によると山口寅之輔は大正10年9月松島苑入口付近の土地を購入、前年大正9年2月には現湘南学園海側にあたる旧大給邸跡地を入手している。この時期、甥高瀬弥一も川袋に移っている(転籍届大正9年9月10日)、寅之輔も鵠沼開発の構想を練っていたのではないだろうか。また砂地と松林の鵠沼に住宅地を……今思うと高瀬家の縁者、山口寅之輔にも先見の明があったと思われる。この時、現鵠沼松が岡3-3-9の借家に娘と婆やの3人で住みながら着々と準備を進めていた模様。途中震災等があったためか大正15年大日本町村全国図刊行会発行の明細地図では松島苑の区画は見られないが、昭和5年発行のものにはきちんとした区画が入っている。また、同年の『大藤澤復興市街地図』にも松島苑として大きな表示があり、その入口付近には山口町の町名も見られる。しかし、その先の熊倉通りへ抜ける道は途中までで、未だ届いていないが、昭和14年の地図(70頁)では整備が進み、ほぼ現在のような形になっている。当初から住んでおられる方の話だと、1区画は100~150坪位、1坪5円ほどだったとか。また、この住宅地売り出しの頃、住宅地入口(現鵠沼藤が谷3-12-25と3-13-15との間の道)にアーチが建っていた記憶があると聞いている。そのアーチには“松島苑入口”という字が書いてあったとのこと。その方の小学生の頃の記憶では(昭和7年前後か)住宅地内の整備が進み、今でも鵠沼の至る所に見られるように区画毎に玉石垣が積まれた。その中に松苗が植えられるようになった頃、北側砂丘の松や木々の緑を背景に、東北の松島を思わせる構想からか“松島苑”と呼ばれるようになったそうだ。

江ノ電鵠沼駅近くに住んでいた松嶋喜作氏(証券業、戦後2代目の参議院副議長)が開いたとよく言われるが、そのようなことはない。

開発の頃の松島苑

この住宅地には最初からガス・水道が入っていたそうだ。昭和20年代頃まで井戸に頼っていた家が多かった鵠沼では、注目に値しよう。

藤沢駅南口より高瀬通り、宮崎通りを経てさらにこの松島苑内の山口通りから、通称海岸通り(江ノ電鵠沼駅から海岸へ向かう道)の大曲の四つ角のところまで一時期江ノ電の乗合自動車が走っていて、父親が利用していたのを記憶する人から

話を聞くことができた。大曲の近くに広田弘毅邸があったことがバスが通っていた一因のようだ。——何人もの人が上記の海岸通りにバスが走っていた記憶を持っていたが、どこを通過して走ってきたのかははっきりしなかった——

松島苑住宅地の通りに面した家2～3軒毎の角に棒杭が打ってあって、そこに松島苑1丁目～5丁目までの表示があった。今思うとその間隔が狭すぎて「エッ!」と思ってしまうものの、当時街並み整備に力を入れていた様子がかげえるようだ。

鵠沼の海岸近くや、現鵠沼松が岡のあたりは、個人の大きな別荘を中心として町並みが整えられていったが、この松島苑一帯は昭和初期の開発分譲地。しかし一筆は広く、松の緑も年々色濃くなって、最近までは鵠沼らしい落ち着いた住宅地の姿を留めていた。そして現在、それなりに変わってきているが、玉石垣に囲まれ、歴史を伝える松の木々が庭先に残っている家々もあり、往時を偲ぶことができる。松島苑通りは通称地名として今後も呼び継がれていくことであろう。その時、かつて開発された“松島苑”という住宅地があったことを思い出していただければ幸いである。そして山口寅之輔という人のことも。

松島苑の開発に努められた山口寅之輔は、現鵠沼松が岡3-3-9の借家から、山口通りに面した現鵠沼桜が岡2-8-32に移り住み、その後神戸の方へ転居したとされているが詳細は判らない。(ありた ひろかず/さとう かずこ)

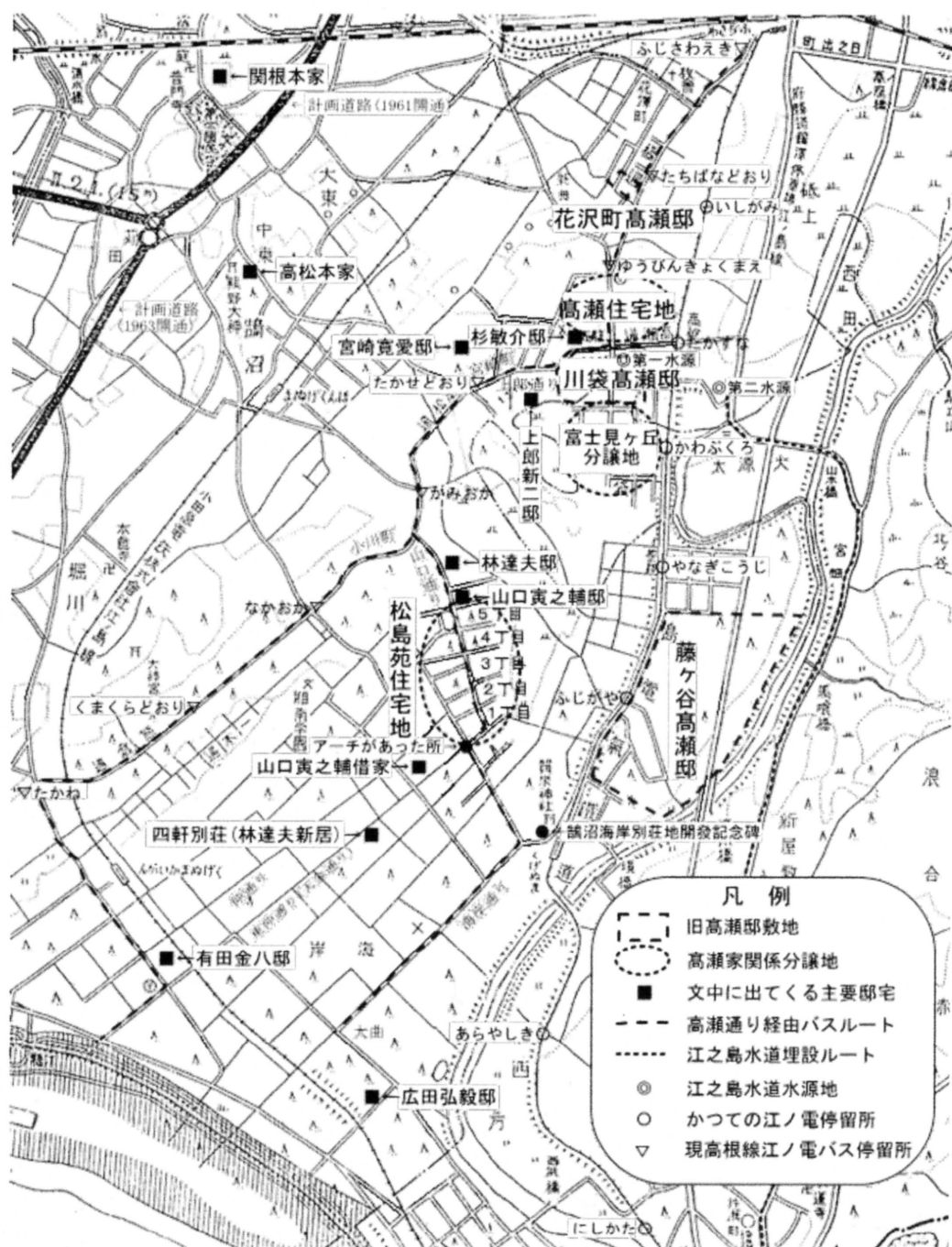
【協力話者】

大山 サキ氏
久保田 克氏
立田 公雄氏

1937(昭和12)年頃の
松島苑住宅地北斜面
松苗が植えられ始めた頃



特集『鵜沼と高瀬家の百年』解説地図



基図は昭和14年藤沢町発行の道路計画地図(厳密には正確な地図ではない)

※原図の注記は右横書き。書き加えた文字は左横書き

「鵠沼を語る会」活動の記録

(平成16年4月～平成16年9月)

総務委員会

運営委員会 3月30日(火) 11名出席

史跡めぐり 4月6日(火) 31名参加

1. 中島会員のコーディネートで鵠沼西部の文人、文化人旧居跡、史跡を訪ねる—東久邇宮王子遭難記念碑～本真寺まで
2. 本真寺で原在住の小林氏から「お寺の由来」などについてお話を伺った。
3. 途中、休憩などについて長谷川会員のお宅にお世話になった。

平成16年4月例会 4月13日(火) 10時～12時 33名出席

- 議題1.** 5月総会準備について—規約の一部改正と役員の一部交代について総会に提案する予定。
2. **会誌の配布**—「会誌88号」(3月31日発行)「別冊今井達夫作品復刻号」(3月8日発行)の2冊を配布した。
 3. **ホームページ開設の件**—ホームページ委員会より4月1日より正式版がスタートしたとの報告がなされた。
ホームページ・アドレス <http://members.jcom.home.ne.jp/katarukai>
 4. **お話**—矢田健爾会員より、会誌「鵠沼」88号にも掲載された鵠沼在住の彫刻家、菅沼五郎氏についてのお話があった。

新入会員 小池 清志氏紹介

運営委員会 4月27日(火) 14名出席

第18回総会・平成16年5月例会 5月11日(火) 10時～12時 33名出席

第18回総会 冒頭に鵠沼市民センター長渡辺忠雄氏の挨拶があった。その後、別紙「第18回総会議案書」の審議を行い全会一致で承認された。

また、役員の一部交代が承認された。

5月例会

- 議題1.** 会誌「鵠沼」89号について—渡部編集長より「高瀬家」についての特集を組むことが紹介された。
2. **例会通知の配布ルートについて**—杉本会員より6月の例会通知から、メール送信を了承していただける会員についてはメールで通知するという提案がありこれが了承された。
 3. 佐藤会員より「サークル交歓会」の報告がなされ本年の「公民館まつり」の日程が10/23～10/24に決定したことも報告された。

4. ビデオ放映—ビデオ「フレスコ画のパイオニア 長谷川路可の世界」

運営委員会 5月25日(火) 12名出席

平成16年6月例会 6月8日(火) 10時～12時 27名出席

冒頭で本年5月26日「鵠沼を語る会」元会長の高木和男氏が逝去されたことの報告がなされた。

議題1. 高木元会長所有の資料調査について—6月15日(火) 有田会長を含む有志で行うこととする。

2. 会誌89号の内容一部変更について—急遽高木和男氏追悼の記事を巻頭に入れるとの報告があり、これを了承した。
3. 昭和40年代の藤沢駅南口付近の航空写真—新発見資料として伊藤会員より紹介。
4. お知らせ配布ルートについて—一部メールによる連絡を実施したため手配りの配布ルートを新たに定めた。
5. 会誌「鵠沼」のバックナンバーについて—内藤会員より報告、最近の発行のもので、85号、87号がすでに在庫ゼロとなっている。
6. お話—本鵠沼(原)在住の小林典夫氏より「鵠沼講中の出羽三山巡礼について」のお話があった。江戸時代に鵠沼のお百姓さんはすでに姓を持っていたことなど興味深いお話であった。

運営委員会 6月29日(火) 13名出席

平成16年7月例会 7月13日(火) 10時～12時 25名出席

議題1. 高木元会長の資料調査報告—6月15日に行ったが、鵠沼関係の資料は思ったより少なかった。

2. 高木邸の保存について—個人の遺志により、地域住民のための施設に利用して欲しいと、藤沢市に寄付されたものである。7月5日に検討委員会が開かれるが、有田会長が「語る会」の代表として参加する。会員の意見として「美術館を要望する」との声があった。
3. 「高木和男氏を偲ぶ会」について—8月22日(日)藤沢市民会館にて開催されとの報告。
4. 「公民館まつり」の展示(案)—企画委員会より「鵠沼浦での地引網」が案として提示された。企画委員会・運営委員会で検討することとする。
5. 郷土資料展示室報告—7/15～9/15 常設展示「海浜リゾートの変遷」
10/15～1/15(予定)特別展示「本村の祭りと年中行事」
6. お話—渡部会員より「鵠沼海岸開発記念碑」(賀来神社)についてのお話があった。

新入会員 佐藤弘氏紹介

運営委員会 7月27日(火) 16名出席

平成16年8月例会 8月10日(火) 10時~12時 30名出席

- 議題1. 「お話」アンケート結果について—中島会員より説明。7月度の例会にて会員に対し①「鵠沼の郷土史」について聞きたいこと②いま興味を持っていること の二点についてアンケートを実施して、その結果が別紙のように発表された。
2. 鵠沼バックナンバーについて—杉本会員より①会員以外の方から頒布の依頼があった場合の取り扱い ②コピー作成の材料費などについて別紙提案がなされ、今後も検討してゆくこととした。
 3. 鵠生園の跡地利用について—中島会員より「鵠沼くらしまちづくり会議」で検討してゆくことが報告された。
 4. お話—本村、上村地区屈指の旧家で鵠沼地区町内会連合会副会長、皇大神宮氏子連合会会長の宮崎誠一氏より「鵠沼皇大神宮の例祭について」お話があった。

新入会員 山本高雄氏紹介

運営委員会—8月31日(火) 16名出席

平成16年9月例会 9月14日(火) 10時~12時 33名出席

- 議題1. 会誌バックナンバー配布について—総務委員会より提案。新入会員も増えて「鵠沼」バックナンバーを入手希望の会員も多い。現在のところ30号までは手書き・ジアゾコピーなので配布は不能。それ以降ならば会員500円、非会員1000円で復刻して配布できる。(作成者杉本会員に製作実費として300円支払うこととする)
2. 会誌「鵠沼」掲載文章の他への転載について—執筆者自身が希望するものについては、会への報告(事後でも可)、「鵠沼〇号からの転載」と記することを条件にこれを認める。
 3. 会誌「鵠沼89号」発行について—印刷日(9/27)などを連絡。
 4. 「公民館まつり」について—企画委員会より「鵠沼浦の地引網」の展示の進行状況について説明を受ける。
 5. 資料配布—青木会員が入手された、理学士 阿部良夫氏著「関東大震災時ニ鵠沼海岸別荘地ニ於ケル状況」のコピーを全員に配布した
 6. お話—鵠沼大東生まれ97歳の関根佐一郎氏より「昔の鵠沼について」ついて、地形(特に砂丘)の移り変わりや、鵠沼小学校の成り立ちなど多岐にわたり、貴重なお話を伺った。

編集後記

- *前号の印刷・製本のために集まったとき、元会長高木和男氏夫人の訃報に接しました。夫君が聖テレジア病院に入院した直後、自宅で倒れたと伺いました。
- *その夫人の死を知らされぬまま、高木氏は入院生活をお続けになりました。会員の何人かがお見舞いに伺いましたが、入院前よりお元気そうだったことでした。しかし、2か月あまり後、千恵子夫人のあとを追うように旅立たれたのです。
- *すでに今号の概要が固まり、執筆の割り振りが決まっていた段階でしたが、6月の編集委員会で、巻頭に追悼文を掲載することになりました。
- *さて、『鵠沼と高瀬家の百年』という大上段に振りかぶったような題の特集を組んでは見たものの、結果としては前半の五十年間だけしか採りあげることができませんでした。
- *それにはさまざまな理由があるのですが、最大の理由は執筆者が張り切って、当初予定したページ数を大幅に上回ったこと、新たに加わった内容があったことがあげられます。編集子が担当した『鵠沼人=高瀬弥一』については、16ページほど書き進んだところで、全体ページ数オーバーが判明し、後半をばっさりカットし、10ページにおさめました。系図や年譜も準備していましたが断念しました。それでも、総ページ数はリミットと考えていた70ページを超えてしまいました。
- *今号には吉川八重子氏に玉稿、高瀬三郎氏に図面をお寄せいただくことができました。記して深く感謝申し上げます。
- *お気づきと存じますが、「たかせやいち」という同一人物の表記に際して「高」と「高」、「瀬」と「瀬」、「弥」と「彌」を用いた順列組合せの例題の如き表現が見られます。これはそれぞれの筆者のそれぞれの思い入れがあるためです。例えば編集子は『序章』では高瀬彌一、後半には『鵠沼人=高瀬弥一』と使い分けていますが、文中で紹介した旧土地台帳謄本と墓碑銘に準拠しています。
- *高瀬弥一が逝ったのは1954年10月5日。没後50周年にこの号を世に問うことになった偶然に感慨を覚えます。(渡部)

『鵠沼』 第89号

平成16年 9月30日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵠沼を語る会

藤沢市鵠沼海岸2-10-3

鵠沼公民館内

電話0466-33-2002

故高木和男氏鵠沼関連年譜

- 1909(明治42) 東京木場にて生まれる
- 1918(大正 7) 夏 喘息療養のため一時鵠沼に移住
- 1920(大正 9) 秋 鵠沼海岸の別荘に定住
- 1921(大正10) 4 20 県立湘南中学校開校。一期生として入学
- 1926(大正15) 10 2 鵠沼海岸の蟹気楼を撮影
- 1926(大正15) 10 27 横浜貿易新聞に鵠沼海岸で蟹気楼が見られると報道
- 1926(大正15) 10 28 東京朝日新聞に鵠沼海岸で蟹気楼が見られると報道
- 1979(昭和54) ? 鵠沼を語る会に入会
- 1979(昭和54) 12 13 大震災前後からの鵠沼海岸(一):『鵠沼』8号
- 1980(昭和55) 1 31 大震災前後からの鵠沼海岸(二):『鵠沼』9号
- 1980(昭和55) 6 19 大震災前後からの鵠沼海岸(三):『鵠沼』10号
- 1981(昭和56) 1 15 大震災前後からの鵠沼海岸(四):『鵠沼』11号
- 1981(昭和56) 4 10 『鵠沼海岸百年の歴史』刊行
- 1982(昭和57) 10 1 『鵠沼海岸百年の歴史増補補正版』刊行
- 1990(平成 2) 11 13 記憶の鵠沼海岸(震災前):『鵠沼』56号
- 1994(平成 6) 9 9 自宅・屋敷を藤沢市に寄贈を申し出(8/31)、受理される
- 1995(平成 7) 5 ? 鵠沼を語る会会長に就任(?)
- 1996(平成 8) 9 17 鵠沼の古道「蘆花が歩いた道」／郷土史研究家渋谷良之氏の「鵠沼のむかし」:『鵠沼』74号
- 1996(平成 8) 10 1 会誌『鵠沼』合本・第1集を発行(代表者)
- 1997(平成 9) 9 7 例会で講話「日本土地所有制度の変遷」
- 1997(平成 9) 9 30 大分賀来神社訪問記／松岡静雄先生が海軍をやめられた事情について:『鵠沼』75号
- 1998(平成10) 9 30 吉田興一さんを悼む:『鵠沼』77号
- 1999(平成11) 5 11 鵠沼を語る会会長を退任。顧問に就任
- 1999(平成11) 12 14 例会で講話「関東大震災の経験と日本をめぐる大地震」
- 2000(平成12) 2 8 久保医療文化賞受賞に際し、会から記念品贈呈
- 2000(平成12) 12 19 千恵子夫人、例会で講話「なぎさクラブについて」
- 2004(平成16) 3 16 千恵子夫人、自宅にて逝去
- 2004(平成16) 5 26 聖テレジア病院にて逝去 享年:95歳